

特279-428



*76W11036 *

庫文堂陽春

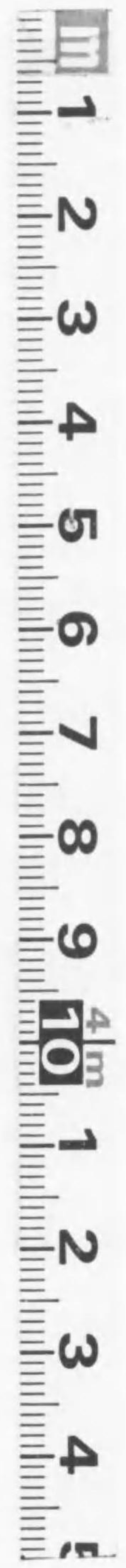
428

1

道入口瀧

牛橋山高

堂陽春



始



74

春陽堂文庫

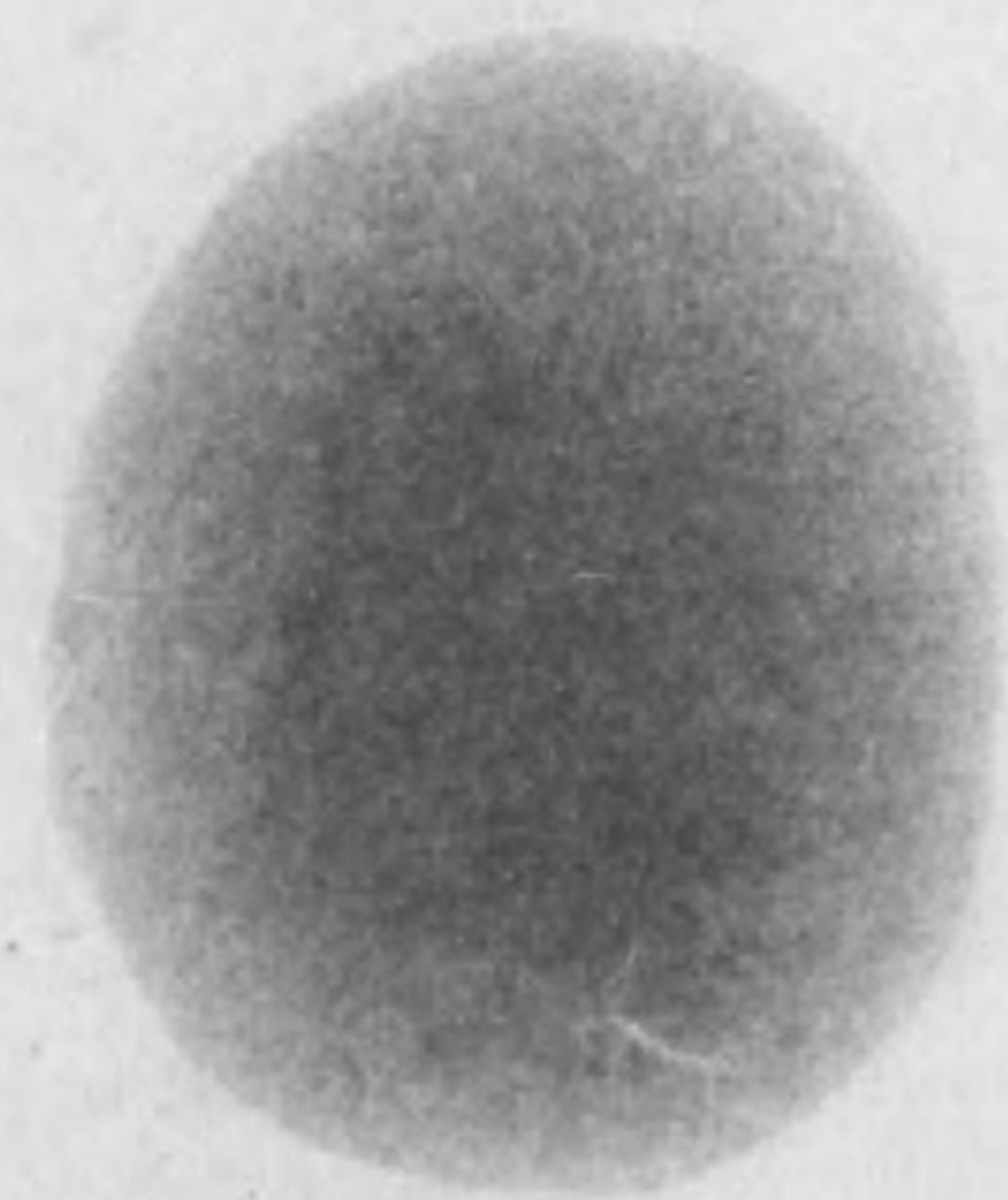
—1—

瀧入口道

高山樗牛



春陽堂



やがて來む壽永の秋の哀れ、治承の春の樂に知る由も無く、六歳の後に昔の夢を辿りて
 直衣の袖を絞りし人々には、今宵の歡會も中々に忘れぬ思寢の涙なるべし。
 驕る平家を盛りの櫻に比べてか散ての後の哀は思はず、入道相國が花見の宴とて、六十餘
 州の春を一夕の臺に集めし都西八條の邸宅、君ならでは人にして人に非ずと唱はれし一門
 の公達、宗徒の人々は言ふも更なり、華胄攝籙の子弟の苟も武門の蔭を覆ひに當世の榮
 華に誇らんずる輩は、今日を晴にと裝飾ひて、綺羅星の如く連りたる有様、燦然として眩
 き計り、さしも善美を盡せる虹梁鴛瓦の砌も影薄けにぞ見えし、あはれ此程までは殿上
 の交をだに嫌はれし人の子、家の族、今は紫紵紋綾に禁色を猥にして、をさく傍若無
 人の振舞あるを見ても、眉を顰むる人だに絶えて無く、夫れさへあるに衣袍の紋色、烏帽
 子のため様まで、萬六波羅様をまねびて時知顔なる世は愈々平家の世と覺えたり。
 見渡せば正面に唐錦の茵を敷ける上に、沈香の脇息に身を持たせ、解脱同相の三衣の下に

76W11036



天魔波旬の慾情を去りやらず、一門の榮華を三世の命とせる入道清盛、さても鷹揚に座せる其傍には嫡子小松の内大臣重盛卿、次男中納言宗盛、三位中將知盛を初として同族の公卿十餘人、殿上三十餘人、其他衛府諸司數十人、平家の一族を擧げて世には又人無くぞ見られける、時の帝の中宮、後に建禮門院と申せしは入道が第四の女なりしかば、此夜の盛宴に漏れ給はず、冊ける女房曹司は皆々晴の衣裳に綺羅を競ひ、六宮の粉黛何れ劣らず粧を凝して、花にはあらで得ならぬ匂ひ、そよ吹く風毎に素袍の袖を掠むれば、末座に並居る若侍等の亂れもせぬ衣髪をつくるふも可笑し、時は是れ陽春三月の暮、青海の簾高く捲上げて、前に廣庭を眺むる大弘間、咲きも残らず散りも初めず、欄干近く雲かと紛ふ満朶の櫻、今を盛りに匂ふ様に、月さへ懸りて夢の如き圓なる影、朧に照渡りて、満庭の風色碧紗に包まれたる如く、一刻千金も音ならず、内には遠侍のあなたより、遙對屋に沿うて樓上樓下を照せる銀燭の光、錦繡の戸帳、龍鬢の板疊に輝きて、さしも廣大なる西八條の館に光到らぬ隈もなし、あはれ昔に有りきてふ、金谷園裏の春の夕もよも是には過ぎじとぞ思はれける。

饗宴の盛大善美を盡せること言ふも慙なり、庭前には錦の幔幕を張りて舞臺を設け、管絃鼓箏の響は興を助けて短き春の夜の闌くるを知らず、豫て召し置かれたる白拍子の舞もはや終りし頃ひ、さと帛を裂くが如き四絃一發の琴の音に連れて、繁絃急管のしらべ洋々として響き互れば、堂上堂下俄に動搖めきて、
 「あれこそは隠れもなき四位の少將殿よ、
 「して此方なる壯年は、
 「あれこそは小松殿の御内に花と歌はれし重景殿よ、
 など女房共の罵り合ふ聲々に、人々等しく樂屋の方を振向けば、右の方より薄紅の素袍に右の袖を肩脱ぎ、螺鈿の細太刀に紺地の水の紋の平緒を下け、白綾の水干、櫻朮黄の衣に山吹色の下襲、背には胡籬を解きて老掛を懸け、露の儘なる櫻かざして立せられたる四位の少將維盛卿、御年辛やく二十二、青絲の髪紅玉の膚、平門第一の美男とてかざす櫻も色失せて、何れを花何れを人と分たざりけり、左の方よりは足助の二郎重景とて、小松殿恩顧の侍なるが、維盛卿より弱きこと二歳にて、今年方に二十の壯年、上下同じ素絹

の水干の下に燃ゆるが如き緋の下袍を見せ、厚塗の立烏帽子に平塵の細靴なるを佩き、杖豊に舞出でたる有様、宛然一幅の畫圖とも見るべかりけり、二人共に何れ劣らぬ優美の姿、適怨清和、曲に隨て一絲も亂れぬ歩武の節、首尾能く青海波をぞ舞ひ納めける、満座の人々感に堪へざるは無く、中宮よりは殊に女房を使に纏頭の御衣を懸けられければ、二人は面目身に餘りて退り出でぬ、跡にて口善悪なき女房共は、少將殿こそ深山木の中の楊梅、足助殿こそ枯野の小松、何れ花も實も有る武士よなど言合りける、知るも知らぬも羨まぬは無に、父なる卿の眼前に此を見て如何計り嬉しく思ひ給ふらんと人々上座の方を打見やれば、入道相國の然も喜ばしけなる笑顔に引換へて、小松殿は差し俯きて人に面を見らるるを懶けに見え給ふぞ訝しき。

第二

西八條殿の搖ぐ計りの喝采を跡にして、維盛重景の退り出でし後に一個の少女こそ顯はれたれ、是ぞ此夜の舞の納めと聞えければ、人々眸を凝して之を見れば年齢は十六七、精好

の緋の袴ふみしだき、柳裏の五衣打重ね、丈にも餘る緑の黒髪後にゆりかけたる様は、舞子白拍子の媚態あるには似て、閑雅に蕩長けて見えにける、一曲舞ひ納む春鶯囀、細きは珊瑚を砕く一兩の曲、風に靡けるさゝがにの絲軽く、太きは瀧津瀬の鳴渡る千萬の聲、落葉の蔭に村雨の響重し、綾羅の袂ゆたかに翻るは花に休める女蝶の翼が、蓮歩の節急なるは蜻蛉の水に點するに似たり、折らば落ちん萩の露、拾はば消えん玉篠のあはれにも亦婉やかなる其姿、見る人懽然として酔へるが如く、布衣に立烏帽子せる若殿原は、あはれ何處の誰が女子ぞ、花薫り月霞む宵の手枕に、君が夢路に入らん人こそ世にも果報なる人なれなど、袖袂引合ひてのしり合へるぞ笑止なる。

榮華の夢に昔を忘れ、細太刀の輕さに風雅の銘を打ちたる六波羅武士の腸をば一指の舞に溶したる彼の少女の、満座の秋波に送られて退り出でしを此夜の宴の終として人々思ひ思ひに退出し、中宮もやがて還御あり、跡には春の夜の朧月、残り惜けに欄干の邊に蛤餅ふも長閑けしや。

此夜、三條大路を左に、御所の裏手の御溝端を辿り行く骨格逞しき一個の武士あり、月を

負ひて其顔は定かならねども、立烏帽子に稜長の布衣を着け、蛭巻の太刀の柄太きを横へたる夜目にも爽かなる出立は、何れ六波羅わたりの内人と知られたり、御溝を挟んで今を盛なる櫻の色に見て欲しけなるに目もかけず、物思はしけに小手又きて、少しくうなだれたる頭の重けに見ゆるは、太息吐く爲にやらん、扱ても春の夜の月光に換へて何の哀れぞ、西八條の御宴より歸り途なる侍の一群二群、舞の評など樂しけに誰憚らず罵り合ひて、果は高笑して打興するを、件の侍は折々耳側で、時に冷やかに打笑む様仔細ありけなり、中宮の御所をはや過ぎて、垣越の松影月を漏さで墨の如く暗き邊に至りて不圖首を擧げて暫し四邊を眺めしが、俄に心付きし早足に元來し道に戻りける、西八條より還御せられたる中宮の御輿、今しも宮門に入りしを見、最と本意無けに跡見送りて門前に佇立みける、後れ馳せの老女の訝しげに己れが容子を打睨り居るに心付き、急ぎ立去らんとせしが、何思けんツと振向て、件の老女を呼止めぬ。

「今宵の御宴の終に春鶯轉を舞はれし女子は何れ中宮の御内ならんと見受けしが、名は何

と言はるゝや、

老女は男の容姿を暫し眺め居たりしが微笑みながら、

「扱も笑止の事も有るものかな、西八條を出る時、色清けなる人の妾を捉へて同じ事を問はれしが、あれは横笛とて近き頃小室の郷より曹司に見えし者なれば、知る人無きも理にこそ、御身は名を聞いて何にし給ふ、」

男はハツと顔赤らめて、

「勝れて舞の上手なれば、」

答ふる言葉聞きも了らで、老女はホ、と意味ありけなる笑を残して門内に走り入りぬ。

「横笛横笛」

件の武士は幾度か獨語ちながら、徐に元來し方に歸り行きぬ、霞の底に響く大覺寺の鐘の聲初更を告ぐる頃にやあらん、御溝の那方に長く曳ける我影に駭きて、傾く月を見返る男、眉太く鼻隆く一見凛々しき勇士の相貌、月に笑めるか、花に咲ふか、あはれ臉の邊に一掬の微笑を帯びぬ。

當時小松殿の侍に齋藤瀧口時頼と云ふ武士ありけり、父は左衛門茂頼とて齡古稀に餘れる老武者にて、壯年の頃より數ヶ度の戰場にて類稀なる手柄を顯したりしが、今は年老たれば其子の行末を頼りに殘年を樂ける、小松殿は其功を賞で給ひ、時頼を瀧口の侍に取立て、數多き侍の中に殊に恩顧を給はりける。

時頼是時年二十三、性潤達にして身の丈六尺に近く筋骨飽くまで逞しく、早く母に別れ武骨一邊の父の膝下に養はれしかば、朝夕耳にせしものは名ある武士が先陣拔懸けの譽ある功名談に非ざれば、弓箭甲冑の故實、髻垂れし幼時より劍の光、弦の響の裡に人と爲りて、浮きたる世の雜事は刀の柄の塵程も知らず、美田の源次が堀川の功名に現を抜して、赤檜の木太刀を振舞はせし十二三の昔より、空腕撫で、長劍の輕きを啣つ、二十三年の春の今日まで、世に畏しき者を見ず、出入の息を除きては六尺の體何處を膽と分くべくも見えず、實に保平の昔を其儘の六波羅武士の模型なりけり、然れば小松殿も時頼を末頼母

しき者に思ひ、行末には御子維盛卿の附人になさばやと常々目を懸けられ、左衛門が伺候の折々に、

「茂頼其方は善き忤を持ちて仕合者ぞ、」

と仰せらるゝを、七十の老父、曲りし背も反らんばかりにぞ嬉しがりける。

時は治承の春、世は平家の盛、そも天喜康平の以來、九十年の春秋、都も鄙も打靡きし源氏の白旗も、保元平治の二度の戦を都の名残に、脆くも武門の衰れを東海の隅に止めしより、六十餘州に到らぬ隈無き平家の權勢、驕る者久しからずとは驕れる者如何で知るべき、養和の秋富士河の水禽も、まだ一年の來ぬ夢なれば、一門の公卿殿上人は言はずもあれ、上下の武士何時しか文弱の流に染みて、嘗て丈夫の譽に見せし向う疵もいつの間にか水鬢の陰に掩はれて、重さを誇りし圓打の野太刀も、何時しか銀造の細鞘に反を打たせ、清らなる布衣の下に練貫の袖さへ見ゆるに、弓矢持つべき手に管絃の調とは言ふもうたてき事なりけり。

時頼世の有様を觀て熟々思ふ様、扱も心得ぬ六波羅武士が舉動かな、父なる人祖父なる人

は、昔知らぬ若殿原に行末短き榮耀の夢を食らせんとて其膏血はよも濃がじ、萬一事有るの曉には、絲竹に鍛へし腕、白金造の打物は何程の用にか立つべき、射向の袖を却て覆ひに捨鞭のみ烈しく打て、笑を敵に残すは眼のあたり見るが如し、君の御馬前に天晴勇士の名を昭して討死すべき武士が、何處に二つの命ありて、歌舞優樂の遊に荒める所存の程こそ知らね——弓矢の外には武士の住むべき世有りとも思はぬ一徹の時頼には、兎角慨はしく、苦々しき事のみ耳目に觸れて平和の世の中面白からず、あはれ何處にても一戦の起れかし、いでや二十餘年の風雨に鍛へし我技倆を顯して、日頃我を武骨者と嘲りし優長武士に一泡吹かせんすと思ひけり、衆人酔へる中に獨り醒むる者は容れられず、斯る氣質なれば時頼は自ら儕輩に疎せられ、瀧口時頼とは無骨者の異名よなど嘲り合ひて、時流外れに粗大なる布衣を着て鐵卷の丸鞘を鷗尻に横へし後姿を蔭にて指し笑ふ者も少からざりし。

西八條の花見の宴に時頼も連りけり、其夜更闌けて家に歸り、其翌朝は常に似ず朝日影窓

* * * * *

11 に差込む頃、やうやく臥床を出でしが、顔の色少しく蒼味を帯びたり、終夜眠らでありしにや。

此夜御所の溝端に人跡絶えしころ、中宮の御殿の前に月を負て歩むは、紛ふ方なく先の夜に老女を捉へて横笛が名を尋ねし武士なり、物思はしげに御門の邊を行きつ戻りつ、月の光に振向ける顔見れば、まさしく齋藤瀧口時頼なりけり。

第四

物の哀も是よりぞ知る、戀ほど世に怪しきものはあらじ、稽古の窓に向て、三諦止觀の月を樂める身も、一朝折かへす花染の香に幾年の行業を捨てし人、百夜の榻の端書につれなき君を怨みわびて、亂れ苦しき忍草の露と消えにし人、さては相見ての後のたゞちの短きに戀悲みし永の月日を恨みて三衣一鉢の空なる情を觀せし人、惟へば孰れか戀の奴に非ざるべき、戀や秋萩の葉末に置ける露のごと、空なれども、中に寫せる月影は圓なる望しとも見られぬべく、今の憂身をつらしと卿てども、戀せぬ前の越方は何を樂に暮しけんと思へば

涙は此身の命なりけり、夕旦の鐘の聲も餘所ならぬ哀に響く今日は、過ぎし春秋の今更
心なきに驚かれ、鳥の聲、蟲の音にも心何となう動きて我にもあらで情の外に行末もな
し、戀せる今を迷と観れば悟れる昔の慕ふべくも思はれず、悟れる今を戀と観れば昔の迷
こそ中々に樂しけれ、戀程世に訝しきものはあらず、そも人何を望み何を目的に渡りぐる
しき戀路を辿るぞ、我も自ら知らず、只臆けながら夢と現の境を歩む身に、ましてや何れ
を戀の始終と思ひ別たんや、そも戀てふもの何こより來り何こをさして去る、人の心の
隈は映すべき鏡なければ何れ思案の外なんめり。

いかなれば齋藤瀧口、今更武骨者の銘打たる鐵卷をよそにし、貢ふにやさしき横笛の名
に笑める、いかなれば時頼、常にもあらで夜を冒して中宮の御所には忍べる、吁々いつし
か戀の淵に落ちけるなり。

西八條の花見の席に中宮の曹司横笛を一目見て時頼は、世には斯る氣高き美しき女子も有
るもの哉と心竊に駭きしが、雲を退め雪を廻す妙なる舞の手振を見もて行くうち、胸怪
しう轟き心何となく安からざるが如く、廿三年の今まで絶て覺なき異様の感情雲の如く湧

出で、例へば渚を閉ぢし池の氷の春風に溶けたらんが如く、若くは満身の力をはりつめ
し手足の節々一時に緩みしが如く、茫然として行衛も知らぬ通路を我ながら踏迷へる思し
て、果は舞終り樂收りしにも心付かず、聽て席を退り出で、何處ともなく出行きしが、あ
はれ横笛とは時頼其夜初めて覺えし女子の名なりけり。

日來快活にして物に鬱する事などの夢にも無かりし時頼の氣風何時しか變りて、憂はし
けに思ひ煩ふ朝夕の様唯ならず、紅色を帯びしつやくしき頬の色少く蒼ざめて、常にも
似で物言ふ事も稀になり太息の數のみぞ唯増さりける、果は濡羽の厚髪に水櫛當て、管長
の大束に今様の大紋の布衣は平生の氣象に似もやらずと、時頼を知れる人訝しく思はぬは
無かりけり。

第五

打て變りし瀧口が今日此頃の有様に、あれ見よ、當世嫌ひの武骨者も、一度は折らねばな
らぬ我慢なるに、笑止や日頃吾等を尻目に懸けて輕薄武士と言はぬ計りの顔、今更何處に

下けて吾等に對ひ得るなど、後指さして嘲り笑ふ者あれども、瀧口少しも意に介せざるが如く應對等は常の如く振舞ひけり、されど自慢の頬鬚搔撫つる隙もなく、青黛の跡絶えず鮮かにして、萌黄の狩衣は摺皮の藪草履などよろづ派手やかなる出立は人目にそれと紛ふべくもあらず、顔容さへ稍々瘵れて起居も懶きが如く見ゆれども、人に向つて氣色の勝れざるを啣らし事もなく、偶々病など無きやと問ふ人あれば、却て意外の面地して常にも益して健かなりと答へけり。

皆是れ戀の業なりとは、哀れや、時頼未だ夢にも心づかず、我ともなく人ともあらで只思ひ煩へるのみ、思ひ煩へる事さへも心自ら知らず、例へば夢の中に伏床を拔出で、終夜山の嶺水の涯を迷ひつくしたらん人こそさながら瀧口が今の有様に似たりとも見るべけれ。

人にも我にも行衛知れざる戀の夢路をば、瀧口何處のはてまで辿りけん、夕とも言はず、曉とも言はず屋敷を出で、行先は己れならで知る人もなく、只門出の勢に引きかへて、戻足の打蕭れたる様、さすがに遠路の勞とも思はれず、一月餘も過ぎて其年の春も暮れ、

青葉の影に時鳥の初聲聞く夏の初となりたれども、かゝる有様の懐まる色だに見えず、はては十幾年の間、朝夕樂みし弓馬の稽古さへ自ら怠り勝になりて、胴丸に積る埃の堆きに目もかけず、名に負へる鐵卷は高く長押に掛けられて、螺鈿の櫻を散せる黒鞘に、摺絞の袖卷指し添へたる立姿は、若し我ならざりせば一月前の時頼、唾も吐きかねざる花奢の風俗なりし。

されば變り果てし容姿に慣れて、笑ひ譏る人も漸く少くなりし頃、蟬聲喧しき夏の暮にもなりけん、瀧口が顔愈々やつれ、頬肉は目立つまでに落ちて眉のみ秀で、凄きほど色蒼白みて、濃かなる双の鬢のみぞ愈々其澤を増しける、氣向かねばとて病と稱して小松殿が熊野參籠の伴にも立たず、動もすれば、己が室に閉籠りて、夜更くるまで寝もやらず、日頃は絶て用なき机に向ひ、一穗の燈挑けて怪しげなる薄色の折紙延べ擴け、命毛の細々と認むる小筆の運び絶間なく、卷てはかへす思案の胸に、果は太息と共に封じ納むる文の數數燈の光に宛名を見れば薄墨の色に哀を籠めて何時の間に習ひけん貫之流の流れ文字に

「横笛さびし」

世に艶めかしき文てふ者を初めて我思ふ人に送りし時は心のみを頼みに、安からぬ日を覺
東なくも暮せしが、籬に觸るゝ夕風のそよとの頼たになし、前もなき只の一度に人の誠の
いかで知らるべきと、更に心を籠めて寄する言の葉も亦仇し矢の返す響も無し、心せはし
き三度五度、答なきほど迷は愈々深み、氣は愈々狂ひ、十度、二十度、哀れ六尺の丈夫が
二つなき魂をこめし千束なす文は、底なき谷に投げたらん礫の如く、只の一度の返り言も
なく、天の戸渡る梶の葉に思ふこと書く頃も過ぎ、何時しか秋風の哀を送る夕まぐれ、露
を命の蟲の音の葉末にすだく聲悲し。

第六

思へば我しらで戀路の闇に迷ひし瀧口こそ哀なれ、鳥部野の煙絶ゆる時なく、仇し野の露
置くにひまなきまゝならぬ世の習はしに漏るゝ我とは思はねども、相見ての刹那に百年の
契をこむる頼もしき例なきにもあらぬ世の中に、いかなれば我のみは、天の羽衣撫で盡す
らむほど永き悲みに、只一時の望だに得協はざる、思へば無情の横笛や、過ぎにし春のこ

のかた、書き連ねたる百千の文に、今は我には言残せる誠も無し、良し有ればとて此上短
き言の葉に、胸にさへ餘る長き思を寄せん術やある、情なの、横笛や、よしや送りし文は
拙なくとも、變らぬ赤心は此の春秋の永きにも知れ、一夜の松風に夢醒て、思淋しき衾
の中に、我ありし事、薄が末の露程も思ひ出さんには、など一言の哀を返さぬ事やあるべ
き、思へば／＼心なの横笛や。

然はさりながら他し人の心、我誠もて規るべきに非らず、路傍の柳は折る人の心に任かせ、
野路の花は摘む主常ならず、數多き女房曹司の中に、いはゞ萍の浮世の風に任する一女子
の身、今日は何れの汀に止りて明日は何處の岸に吹かれやせん、千束なす我文は讀みも了
らで捨てやられ、さそふ秋風に桐一葉の哀を殘さざらんも知れず、況してあてやかなる彼
が顔は、浮きたる色を愛つる世の中にそも幾その人を惱しけん、かの宵にすらかの老女を
捉へて色清けなる人の、嫉まじや、早や彼が名を尋ねしとさへ言へば、思を寄するもの我
のみにては無かりけり、よしや他にはあらぬ赤心を寄するとも、風や何處と聞き流さん、
浮きたる都の艶女に二つなき心盡しのかす／＼は我身ながら耻しや、ア、心なき人に心し

て我のみ迷ひし愚さよ。
 待てしばし、然るにても立波荒き大海の下にも人知らぬ眞珠の光あり、外には見えぬ木影にも情の露は宿する例、まよならぬ世の習はしは、善きにつけ、悪しきにつけ、人毎に他には測られぬ憂はあるものぞかし、あはれ後とも言はず今日の今、我が此思を其儘にいつれいかなる由ありて、我思ふ人の悲み居らざる事を誰か知るや、想へば那の氣高き藤たけたる横笛を萍の浮きたる艶女とは僻める我心の誤ならんも知れず、さなり、我心の誤ならんも知れず、鳴く蟬よりは鳴かぬ螢の身を焦すもあるに、聲なき哀の深さに較ぶれば、仇浪立てる此胸の淺瀬は物の數ならず、そもや心なき草も春に遇へば笑ひ、情なき蟲も秋に感ずれば泣く、血にこそ染まね、千束なす紅葉重の燃ゆる計りの我思に、薄墨の跡だに得返さぬ人の心の有耶無耶は誰か測り誰か知る、然なり、情なしと見、心なしと思ひしは僻める我身の誤なりけり、然るにても——
 瀧口の胸は麻の如く亂れ、とつおいつ、或は恨み、或は疑ひ、或は惑ひ、或は慰め、去りては來り往きては還る念々不斷の妄想、流は千々に異れども落行く末はいづれ同じ戀慕の

淵、迷の羅絆目に見えねば、勇士の刃も切りんに術なく、あはれや、鬼を挫がんす六波羅一の剛の者、何時の間にか戀の奴となりすましぬ。
 一夜時頼、更闌けて尙眠りもせず、意中の幻影を追ひながら爲す事も無く茫然として机に憑り居しが、越し方、行末の事、端なく胸に浮び、今の我身の有様に引き比べて思はず深々と太息つきしが、何思ひけん、一聲高く胸を叩て躍り上り
 「嗚呼過てり／＼」

第七

歌物語に何の癡言と聞き流せし、戀てふ魔にさては吾れ疾より魅せられしかと、初て悟りし今の刹那に瀧口が心は如何なりしぞ。

「嗚呼過てり」

とは何より先に口を衝いて覺えず出でし意料無限の一語、襟元に雪水を浴びし如く、六尺の總身ふる／＼と震ひ上りて、胸轟き息せはしく、

「む」

とばかり暫時は空を睨で無言の體、やがて眼を閉てつくづく過越方を想ひ返せば、哀れにもつらかりし思の數々、さながら世を隔てたらむ如く、今更明し暮せし朝夕の如何にして驚かれぬる許り、夢かと思へば、現せ身の陽炎の影とも消えやらず、現かと思れば夢よりも尙淡き此の春秋の経過、例へば永の病に本性を失ひし人のやうやく我に還りしが如く瀧口は只恍惚として呆るゝ許りなり。

「嗚呼過てり、弓矢の家に生れし身の天晴功名手柄して、勇士の譽を後世に残すこそ此世に於ける本懐なれ、何事ぞ、眞の武士の唇頭に上するも忌はしき一女子の色に迷うて、可惜月日を夢現の境に過さんとは、あはれ南無八幡大菩薩も照覽あれ、瀧口時頼が武士の魂の曇なき證據、眞此の通りし、

と、床なる一刀スラリと抜きて青燈の光に差し付ければ、爛々たる氷の刃に、水も滴らんす無反の切先、鏢を銜て紫雲の如く立上る焼刃の匂目も覺むる許り、打見やりて時頼莞爾と打笑み、二振三振、不圖平身に映る我顔見れば、こはいかに、肉落ち色蒼白く、ありし

昔に似もつかぬ、悲惨の容貌、打駭きてためつ、すがめつ、見れば見るほど變り果てし面影は我ならで外になし、扱も瘦れたるかな、愧しや我を知れる人は斯る容を何とか見けん——そも斯くまで骨身をいたためし哀を思へば、深さは我ながら程知らず、是も誰が爲、思へば無情の人心かな。

碎けよと握り詰めたる柄も氣も、何時しか緩みて、臥蓋の太眉閃々と動きて、覺えず、
「あゝ」

と太息つけば霞む刃に心も曇り、映るは我面ならで、烟の如き横笛が舞姿、是はとばかり眼を閉ち、氣を取直し、鏢音高く刃を鞘に納むれば、跡には燈の影ほの暗く、障子に映る影さびし。

嗚呼々々六尺の體に人並の膽は有りながら、さりとは腑甲斐なき我身かな、影も形もなき妄念に惱されて、しらで過ぎし日はまだしもなれ、迷の夢の醒め果てし今はの際に、めしき未練は、あはれ武士ぞと言ひ得べきか、輕しと啣ちし三尺二寸、双腕かけて疊みしはそは何の爲の極意なりしぞ、祖先の苦勞を忘れて風流三昧に現を抜かず當世武士を尻目に

かけし、半歳前の我は今何處にあるぞ、武骨者と人の笑を心に誇りし齋藤時頼に、あはれ今無念の涙は一滴も残らずや、そもや、瀧口が此身は空蟬のもぬけの殻にて、腐れし迄も昔の膽の一片も残らぬか。

世に畏るべき敵に遇はざりし瀧口も、戀てふ魔神には引く弓も無きに呆れはてぬ、無念と思へば心愈々亂れ、心愈々亂るゝに隨れて、亂脈打てる胸の中に迷の雲は愈々擴がり、果は狂氣の如くいらちて、時ならぬ鳴絃の響、劍撃の聲に胸中の渾沌を清さんと務むれども、心茲にあらざれば見れども見えず聞けども聞えず、命の蔭に蹲踞る一念の戀は、玉の緒ならで断たん術もなし。

誠や、戀に迷へる者は猶底なき泥中に陥れるが如し、一寸上に浮ばんとするは一寸下に沈むなり、一尺岸に上らんとするは、一尺底に下るなり、所詮自ら掘れる墳墓に埋るゝ運命は、悶え苦みて些の益もなし、されば悟れるとは己れが迷を知ることにて、それを脱せるの謂にはあらず。

哀れ、戀の鳩毒を渣も残さず飲み干せる瀧口は、只坐して致命の時を待つの外なからむ。

第八

消えわびん露の命を何にかけてや繋ぐらんと思ひきや、四五日経て瀧口が顔に憂の色漸く去りて、今までの如く物につけ事に觸れ、思ひ煩ふ様も見えず、胸の嵐はしらねども、表面は楨の梢のさらとも鳴さず、何者か失意の戀にかへて其心を慰むるものあればならむ。

一日瀧口は父なる左衛門に向ひ、
「父上に事改めて御願致し度き一義あり」、

左衛門

「何事ぞ」、

と問へば、

「斯る事、我口より申すは、如何なものなれども、二十を越えてはや三歳にもなりたれば、家に洒掃の妻なくては萬の事缺けて快からず、幸ひ時頼見定め置きし女子有れば、父上より改めて婚禮を御取計らひ下され度く、願と云ふは此事に候」、

人傳てに名を聞いてさへ愧らふべき初妻が事、顔赤らめもせず、落付き拂ひし語の言ひ様、仔細ありけなり、左衛門笑ひながら、

「これは異な願を聞くものかな、晚かれ早かれ、いつれ持たねばならぬ妻なれば、相應はしき縁もあらばと老父も疾くより心懸け居りしぞ、シテ其方が見定め置きし女子とは、何れの御内か、但しは御一門にてもあるや、どうぢや、」

「小子が申せし女子は、然る門地ある者ならず、」

「然らばいかなる身分の者ぞ、衛府附の侍にてもあるか、」

「否、さるものには候はず、御所の曹司に横笛と申すもの、聞けば小室わたりの郷家の娘なりとの事、」

瀧口が顔は少しく青ざめて、思ひ定めし眼の色徒ならず、父は暫し言なく俯ける我子の顔を凝視め居しが、

「時頼、そは正氣の言葉か、」

「小子が一生の願、神以て詐ならず、」

左衛門は両手を膝に置直して聲勵まし、

「やよ時頼、言ふまでもなき事なれば、婚姻は一生の大事と言ふこと、其方知らぬ事はあるまじ、世にも人にも知られたる然るべき人の娘を嫁子にもなし、其方が出世をも心安うせんと、日頃より心を川ゆる父を其方は何と見つるぞ、よしなき者に心を懸けて家の譽をも顧みぬほど無分別の其方にてはなかりしに、扱は兼てより人の噂に違はず、横笛とやらの色に迷ひしよな、」

「否、小子こと色に迷はず香にも酔はず、神以て戀でもなく浮氣でもなし、只少しく心に誓ひし仔細の候へば、」

左衛門は少しく色を起し、

「黙れ時頼、父の耳目を欺かん其語、先頃其方が僧輩の足助の二郎殿、年若きにも似ず、其方が横笛に想を懸け居ること後の爲ならずと懇に潜に我に告げ呉れしが、其方に限りて浮きたる事のあるべきとも思はれねば心も措かて過ぎ来りしが思へば、父が庇蔭目の過なりし、神以て戀にあらずとは、何處まで此父を袖になさんする心ぞ、不埒者め、」

話にも聞きつらん、祖先兵衛直頼殿、餘五將軍に仕へて拔群の譽を擧せしこのかた、弓矢の前には後れを取らぬ齋藤の血統に、女色に魂を奪はれし未練者は其方が初ぞ、それにて武門の耻と心付かぬか、弓矢の手前に面目なしとは思はずか、同じくば名ある武士の末にてもあらばいざしらず、素性もなき土民郷家の娘に、茂頼斯くて在らん内は、齋藤の門をくゞらせん事思ひも寄らずし、

老の一徹短慮に息巻き荒く罵れば、時頼は黙然として只差俯けるのみ、やゝありて左衛門は少しく面を和けて、

「いかに時頼、人若き間は皆過ちはあるものぞ、萌出る時の美はしさに、霜枯の哀は見えねども、何れか秋に遭はで果つべき、花の盛は僅に三日にして跡の青葉は何れも色同じ、あてやかなる女子の色も十年はよも續かぬものぞ、老いての後に顧れば色めづる若き時の心の我ながら解らぬほど痴けたる者なるぞ、過は改むるに憚る勿れとは古哲の金言、父が言葉腑に落ちたるか、横笛が事思ひ切りたるか、時頼、返事のなきは不承知か、今まで眼を閉ぢて黙然たりし瀧口は、やうやく首を擡けて父が顔を見上げしが、兩眼は潤

ひて無限の情を湛へ、満面に顯せる悲哀の裡に搖かぬ決心を示し、徐に兩手をつきて、

「一々道理ある御仰、横笛が事、只今限り刀にかけて思ひ切て候、其代に時頼が又の願、御聞届下さるべきや、」

左衛門は左もありなんと打點頭き、

「それでこそ茂頼が悴、早速の分別、父も安堵したるぞ、此上に願とは何事ぞ、」

「今日より永のおん暇を給はりたし、」
言終るや、堰止かねし溜涙、はら／＼と流しぬ。

第九

天にも地にも意外の一言に、左衛門呆れて口も開かず、只其子の顔色打睨れば、瀧口は徐に涙を拂ひ、

「思の外なる御驚に定めて浮の空とも思されんが、此願こそは時頼が此座の出来心には露候はず、斯る曉にはと豫てより思決めし事に、候、事の仔細を申さば只御心に違ふ

のみなるべけれども、申さざれば猶以て亂心の沙汰とも思召されん、申すも思はゆけなる横笛が事、まこと言ひ交せし事だに無けれども、我のみの哀は中々に深さの程こそ知れね、つれなき人の心に猶更狂ふ心の駒を繋ぐむ手綱もなく、此の春秋は我身ながら苦かりし、神かけて戀に非ず、迷に非ずと我は思へども、人には浮氣とや見えもしけん、唯劍に切らん影もなく、弓も射んたもなき心の敵に向て、そも幾その苦戦をなせしやは、父上、此顔容のやつれたるにて御推量下されたし、時頼が六尺の軀によくも擔ひしと自らすら駭く計りなる積りくし憂事の數、我ならで外に知る人もなく、只戀の奴よ、心弱き者よと、世上の人に歌はれん残念さ、誰に向て推量あれとも言はん人なきこそ、かへすがへすも口惜しけれ、此儘の身にてはどの顔下けて武士よと人に呼ばるべき、腐れし心を抱きて、外見ばかりの伊達に指さんこと、兩刀の曇なき手前に心とがめて我から忍びず、只此上は横笛に表向き婚姻を申入るゝ外なし、されどつれなき人心、今更廢かん様もなく、且や素性賤しき女子なれば、物堅き父上の御容しなきこと元より覺悟候ひしが、只最後の思出にお耳を汚したる迄なりき、所詮天魔に魅入られし我身の定業と

思へば、心を煩はす者更に無し、今は小子が胸には横笛がつれなき心も残らず、月日と共に積りし哀も宿さず、人の恨も我悲も洗ひし如く痕なけれども、残るは只此世の無常にして頼み少きこと、秋風の身にしみくんと感じて有漏の身の換へ難き恨、今更肯身に徹へ候、惟れば誰が保ちけん東父西母が命、誰が嘗めたりし不老不死の藥、電光の裏に假の生を寄せて、妄念の間に露の命を苦む、愚なりし我身なりけり、横笛が事御容なきこそ小子に取りては此上もなき善智識、今日を限りに世を厭て誠の道に入り、墨染の衣に一生を送りたき小子が決心、二十餘年の御恩の程は申すも愚なれども、何れ遁れ得ぬ因果の道と御諦ありて、永の御暇を給はらんこと、時頼が今生の願に候、
胸一杯の悲に語さへ震へ、語了ると其儘齒根喰ひ絞りて、詰と耐ゆる斷腸の思、勇士の愁嘆流石にめしからず。

過ぎ越せし六十餘年の春秋、武門の外を人の住むべき世とも思はず、涙は無念の時出づるものぞと思ひし左衛門が耳に、哀れに優しき瀧口が述懐の、何として解かるべき、歌詠む人の方便とのみ思ひ居し戀に惱みしと言ふさへあるに、木の端とのみ嘲りし世捨人が現

在我子の願ならんとは、左衛門如何でか驚かざるを得べき、夢かとはかり一度は呆れ、一度は怒り、老の兩眼に溢るゝ計りの涙を浮べ、
 「やよ悴、今言ひしは慥に齋藤時頼が眞の言葉か、幼少より筋骨人に勝れて逞しく、膽力さへ坐りたる其方、行末の出世の程も頼母しく、我自髮首の生甲斐あらん目をば、指折りながら待侘び居たるには引換へて、今と言ふ今老の眼に思ひも寄らぬ耻辱を見る者かな、奇怪とや言はん、不思議とや言はん、慈悲深き小松殿が、左衛門は善き子を持たれし、と我を見給ふ度毎のお言葉を常々人に誇りし我れ、今更乞食坊主の悴を持て、いつこに人に合する二つの顔ありと思うてか、やよ、時頼、ヨック聞け、他は言はず、先祖代々よりの齋藤一家が被りし平家の御恩はそも幾何なりと思へるぞ、殊に弱年の其方を那程に目をかけ給ふ小松殿の御恩に對しても、よし如何に堪へ難き理由あればとて、斯る方外の事、言はれ得る義理か、弓矢の上こそ武士の譽はあれ、兩刀捨てゝ世を捨てて、悟り顔なる悴を左衛門は持たざるぞ、上氣の沙汰ならば容赦もせん、性根を据ゑて不所存のほど過つたと言はぬかッ、

兩の拳を握て、怒の眼は鋭けれども恩愛の涙は忍ばれず、双頬傳てはふり落つるを拭ひもやらず、一息つよく、
 「どうぢや、時頼返答せぬかッ、

第十

深く思ひ決めし瀧口が一念は石にあらねば轉ばすべくも非ざれども、忠と孝との二道に、恩義をからみし父の言葉、思ひ設けし事ながら、今更に腸も千切るゝばかり、聲も涙に曇りて、見上ぐる父の顔も定かならず、

「仰せらるゝ事、時頼いかで理と承はらざるべき、小松殿の御事は云ふも更なり、年寄り給ひたる父上に、斯る嘆を見せ参らする小子が胸の苦しきは、喩ふるに物も無けれど、所詮浮世と觀じては、一切の望に離れし我心、今は返さん術もなし、忠孝の道、君父の恩、時頼何として疎かに存じ候べき、然りながら一度人身を失へば萬劫還らずとかや、世を換へ生を移しても生死妄念を離れざる身を思へば、悟の日の晩かりしに心急

かれて、世は是迄とこそ思はれ候へ、只是れまで思ひ決めしまで重ねがさねし幾重の思案をば、御知なき父上には、定めて若氣の短慮とも、當座の上氣とも聞かれつらんこそ口惜しけれ、一生の浮沈に關る大事、時頼不肖ながらいかでか等閑に思ひ候べき、詮するに自他の悲を此胸一つに收め置て、亡らん後の世まで知る人もなき身の果なき、今更是非もなし、父上、願ふは此世の縁を是限りに、時頼が身は二十三年の秋を一期に病の爲に敢なくなりしとも御諦らめ下されかし、不孝の悲は胸一つには堪へざれども、御詫申さんに辭もなし、只々御赦を乞ふ計りに候し、

磯ぐ涙に哀れを籠めても、飽くまで世を背に見たる我子の決心、左衛門今は夢とも上氣とも思はれず、愛しと思ふほど彌増す憎さ、慈悲と恩愛に燃ゆる怒の焰に满面朱を濺けるが如く、張り裂く計りの胸の思に言葉さへ絶えぬに、

「イ言はして置けば父をさし置きて我れ面白の勝手の理窟、左衛門聞く耳持たぬぞ、無常因果と、世にも癡けたる乞食坊主のえせ假聲、武者がどの口もて言ひ得る語ぞ、弓矢とる身に何の無常、何の因果、——時頼、善く聞けよ、畜類の狗さへ、一日の飼養に三年

の恩を知ると云ふに非ずや、匍へば立て、立てば歩めと、我年の積るをも思はで育て上けし廿三年の親の辛苦、さては重代相恩の主君にも見換へん者、世に有りと思ふ其方は、犬にも劣りしとは知らざるか、不忠とも、不孝とも、亂心とも、狂氣とも、言はん様なき不所存者、左衛門が眼には、我子の容に化けし悪魔とより外は見ざるぞ、それにて、見事共處に居直りて、齋藤左衛門茂頼が一子ぞと言ひ得るか、ならば御先祖の御名、立派に申して見よ、其方より暇乞ふ迄もなし、人の數にも入らぬ木の端は、勿論親でもなく、子でもなし、其一念の直らぬ間は、時頼シ、七生までの義絶ぞし、

言ひ捨て、襖立切り、疊觸りも荒々しく、ツと奥に入りし左衛門、跡見送らんとせせず、時頼は両手をはたとつきて、兩眼の涙さながら雨の如し。外には鳥の聲うら悲しく、枯れもせぬに散る青葉二つ三つ、無情の嵐に揺落されて窓打つ音さへ恨めしけなる——あはれ、世は汝のみの浮世かは。

一門の采邑六十餘州の半を越え、公卿殿上人三十餘人、諸司衛府を合せて、門下郎黨の大官榮職を恣にするもの其數を知らず、けに平家の世は今を盛とぞ見えにける、新大納言が隠謀脆くも敗て身は西海の隅に死し、丹波の少將成經、平判官康頼、法勝寺の執事俊寛等、徒黨の面々、波路遙に名も恐しき鬼界が島に流されしより、世は愈々平家の勢に麟伏し、道路目を側つれども背後に指す人だになし、一國の生殺與奪の權は入道が眉目の間に在りて、衛府判官は爪牙たるに過ぎず、苟も身一門の末葉に連れば、公卿華胄の公達も敢て肩を並ぶる者なく、前代未聞の榮華は、天下の耳目を驚かせり、されば日に増し募る入道が無道の行爲、一朝の怒に其の身を忘れ、小松内府の諫をも用るす、恐多くも後白河法皇を鳥羽の北殿に押籠め奉り、卿相雲客の或は累代の官職を禡れ、或は遠島に流人となるもの四十餘人、鄙も都も怨嗟の聲に充ち、天下の望既に離れて衰亡の兆漸く現れんとすれども、今日の歡に明日の哀を想ふ人もなし、盛者必衰の理とは謂ひながら、權門の末路、中中に言葉にも盡されぬ。

父入道が非道の舉動は一次再三の苦諫にも及れず、父君の間に立ちて忠孝二道に一身の兩

全を期し難く、驕る平氏の行末を浮べる雲と頼なく、思積りて熟々世の無常を感じたる小松の内大臣重盛卿、先頃思ふ旨ありて、熊野參籠の事ありしが、歸洛の後は一室に閉籠りて猥に人に面を合せ給はず、外には所勞と披露ありて出仕もなし、然れば平生徳に懐き恩に浴せる者は言ふも更なり、知るも知らぬも潜に憂ひ傷まざるはなかりけり。

短き秋の日影もや西に傾きて、風の音さへ澄渡るはつき半の夕暮の空、前には閑庭を控へて左右は廻廊を繞し、青海の簾長く垂れこめて、微月の銀鉤空しく懸れる一室は、小松殿が居間なり、内には寂然として人なきが如く、只簾を漏れて心細くも立迷ふ香煙一縷、折折かすかに聞ゆる憂々の音は念珠を爪繰る響にや、主が消息を齎していと奥床し。

「誰かある」、
と呼ぶ聲す、那方なる廊下の妻戸を開けて徐に出來りたる立烏帽子に布衣着たる侍は齋藤瀧口なり。

「時頼参りて候」

と申上ぐればやがて一間を出立給ふ小松殿、身には山藍色の形木を摺りたる白布の服を纏ひ、手には水晶の珠数を懸けありしにも似ず瘠れ給ひし御顔に笑を含み、

「珍らしや瀧口、此程より病氣の由にて、予が熊野参籠の折より見えざりしが、僅の間に痛く瘦せ衰へし其方が顔容、日頃は鬼とも組まんす勇士も身内の敵には勝たれぬよな、病は癒えしかし、

瀧口はやゝしばし、詰と御顔を見上げ居たりしが、

「久しく御前に遠りたれば、餘りの御懐しさに病餘の身をも顧みず、先刻遠侍に伺候致せしが、幸にして御拜顔の折を得て時頼身にとりて恐悦の至に候し、

言ふと其儘御前に打伏し、濡羽の鬘に小波を打たせて悲愁の様子、徒ならず見えけり。

36 哀れや、瀧口、世を捨てん身にも、今を限の名残には一切の諸縁何れか煩惱ならぬは無し、此世の思出に夫とはなしに餘所ながらの告別とは神ならぬ身の知り給はぬ小松殿、瀧口が平生の快活なるには似もやらで、打萎れたる容姿を、訝しげに見やり給ふぞ理なる。

四方山の物語に時移り、入日の影も何時しか消えて冴え渡る空に星影寒く、階下の叢に蟲の泣聲露ほしけなり、燭を運び来りし水干に緋の袴着けたる童の後影見送りて、小松殿は聲を忍ばせ、

「時頼近う寄れ、得難き折なれば、予が改めて其方に頼み置く事ありし、

第十二

一穗の燈を挾して相對せる小松殿と時頼、物語の様最と蕭やかなり。

「こは思も寄らぬ御言葉を承はり候ものかな、御世は盛とこそ思はれつるに、など然る忌はしき事を仰せらるゝにや、憚り多き事ながら、殿こそは御一門の柱石、天下萬民の望の集る所、吾れ人諸共に御運の程の久しかれと、祈らぬ者はあらざるに、何事にて御在するぞ、聊かの御不例に忌はしき御身の後を仰せ置かるゝとは、殊更少將殿の御事、不肖弱年の時頼、如何にか御托命の重きに堪へ申すべき、御言葉のゆるよし、時頼つやつや合點参らずし、

「時頼、さては其方が眼にも世は盛と見つるよな——世は盛に見ゆればこそ、衰へん末の事の一入深く思ひ遣らるゝなれ、弓矢の上に天下を與奪するは武門の慣習、遠き故事を引くにも及ばず、近き例は源氏の末路、仁平久壽の盛の頃には、六條判官殿、如何でか其一族の今日あるを思はれんや、治に居て亂を忘れざるは長久の道、榮華の中に没落を思ふも徒に重盛が杞憂のみにあらし、」

「然るにても幾千代重ねん殿が御代なるに、など然ることの候はんや、」
「否とよ、時頼、朝の露よりも猶空なる人の身の、何時消えんも測り難し、我れ斯くてだに在らんにはと思ふ間さへ中々に定かならざるに、いかで年月の後のことを思ひ料らんや、我しも兎も角もならん跡には心に懸るは只少將が身の上、元來孱弱の性質、加ふるに幼より詩歌數寄の道に心を寄せ、管絃舞樂の娛の外には弓矢の譽あるを知らず、其方も見つらん、去んぬる春の花見の宴に、一門の面目と稱へられて舞妓白拍子にも比すべからん己が優技をばさも誇り顔に見えしは、親の身の中々の恥しかりし、一旦事あらば、妻子の愛、浮世の望に惹かれて、如何なる未練の最期を遂ぐるやも測られず、世

の盛衰は是非もなし、平家の嫡流として、卑怯の舉動などあらんには、祖先累代の耻辱是上あるべからず、維盛が行末守り呉れよ時頼、之ぞ小松が一期の頼なるぞ、」
「そは時頼の分に過ぎたる仰にて候ぞや、現在足助二郎重景など屈竟の人々少將殿の扈從には候はずや、若年未熟の時頼、人に勝りて何の能ありて斯る大任を御受申すべき、」
「否々左にあらず、いかに時頼、六波羅上下の武士が此頃の有様を何とか見つる、一時の太平に狎れて衣紋装束に外見を飾れども、誠武士の魂あるもの幾何かあるべき、華奢風流に荒める重景が如き、物の用に立つべくもあらず、只彼が父なる與三左衛門景安は平治の激亂の時、二條堀河の邊りにて、我に代りて惡源太が爲に討たれし者ゆゑ、其遺功を思つて我名の一字を與へ少將が扈從となせしのみ、繰言ながら維盛が事頼むは其方一人、少將事あるの日、未練の最期を遂ぐる様の事あらんには、時頼、予は草葉の蔭より其方を恨むぞよ、」

思ひ入りたる小松殿の御氣色、物の哀を含めたる、心ありけの語の端々も、餘りの忝なさに思ひ紛れて、只感涙に咽ぶのみ、風にあらで小忌の衣に漣立ち、持ち給へる珠數震

ひ揺ぎて、さら／＼と音するに、瀧口首を擦けて、小松殿の御様を見上ぐれば、燈の光に半面を背けて、御袖の唐草に徒ならぬ露を忍ばせ給ふ、御心の程は知らねども、痛はしさは一入深し、夜も更け行きて、何時しか簾を漏れて青月の光妻く、澄渡る風に落葉響きて、主が心問ひたけなり。

蟲の音互りて月高く、いづれ哀は秋の夕、憂しとても逃れん術なき己が影を踏みながら、腕又きて小松殿の門を立出でし瀧口時頼、露にそほちてか布衣の袖重けに見え、足の運さながら酔へるが如し、今更思決めし一念を吹かへす世の秋風は無けれども、積り／＼し浮世の義理に迫られ、胸は涙に塞りて、月の光も朧なり、武士の名残も今宵を限り、餘所ながらの告別とは知り給はで、亡からん後まで頼み置かれし小松殿、御仰の忝さと、是非もなき身の不忠を想ひやれば、御言葉の節々は骨を刻むより猶つらかりし、哀れ心の灰は冷え果て、浮世に立てん烟もなき今の我、あゝ何事も因果なれや。

40 月は照れども心の闇に夢とも現とも覺えず、行衛もしらず歩み來りしが、ふと頭を擧ぐれば、こはいかに身は何時の間にか御所の裏手、中宮の御殿の邊に立てりける、此春より來慣

41 れたる道なればにや、思はぬ方に迷ひ來しものかな、と無情かりし人に通ひたる昔忍ばれて、築垣の下に我知らず、イみける、折柄傍なる小門の蔭にて「横笛」と言ふ聲するに心付き、思はず振向けば、立烏帽子に狩衣着たる一個の侍の此方に背を向けたるが、年の頃五十許りなる老女と額を合せて囁けるなり。

第十三

月より外に立聞ける人ありとも知らで、件の侍は聲潜ませて、

「いかに冷泉、折重ねし薄様は薄くとも、こめし哀は此秋よりも深しと覺ゆるに、彼の君の氣色は如何なりしぞ、夜毎の月も數へ盡して、圓なる影は二度まで見たるに、身の願の満たん日は何れの頃にや、頼み甲斐無懸橋よ、怨の言葉を言はせも敢ず、老女は疎らなる齒莖を顯はしてホ、と打笑み、

「然りとは戀する御身にも似合はぬ事を、此の冷泉に如才は露無けれども、まだ都慣れぬ彼の君なれば、御身が事可愛しと思ひながら、返す言葉のはしたなしと思はれんなど

思ひ煩うて、在すにこそ、咲かぬ中こそ苔ならずや、
言ひつゝと男の傍に立寄りて耳に口よせ、何事か暫し嘯きしが、一言毎に點頭きて冷かに打笑める男の肩を軽く叩きて、

「お解りになりしや、其時こそは此の老婆にも、秋にはなき梶の葉なれば、渡しの料は忘れ給ふな、世にも憎きほど羨ましき二郎ぬしよ、」

男は打笑ふ老女の袂を引きて、

「そは誠か、時頼めは愈々思ひ切りしとか、」

己れが名を聞きて松影に潜める瀧口は愈々耳を澄しぬ、老女、

「此春より引きも切らぬ文の、此の二十日計りはそよとだに音なきは、言はでも著るき、

空なる戀と思ひ絶えしにあんなれ、何事も此の老婆に任せ給へ、又しても心元なけに見

え給ふことの恨めしや、今こそ枯枝に雪のみ積れども、鶯鳴せし春もありし老婆、萬

に抜目の有るべきや、

袖もて口を覆ひさなきだに繁き額の皺を集めて、ホ、と打笑ふ様、見苦しき事はん方な

後の日を約して小走りに歸り行く男の影をつくく見送りて、瀧口は枯木の如く立ちすくみ、何處ともなく見詰むる眼の光徒ならず、

「二郎・二郎とは何人ならん、」

獨りごちつゝ首傾けて暫し思案の様なりしが、忽ち眉揚り眼鏡く、

「さては、」

とばかり面色見る見る變りて、握り詰めし拳ぶるくと震ひぬ、何に驚きてか、垣根の蟲、礫と泣き止みて、空に時雨るゝ落葉散る響だにせず、良ありて瀧口顔色和らぎて握りし拳

も自ら緩み、只太息のみ深し、

「何事も今の身には還らぬ夢の恨もなし、友を賣り人を詐る末の世と思へば吾が爲に善智

識ぞや、誠なき人を戀ひしも浮世の習と思へば少しも腹立たず、

立上りつゝ築垣の那方を見やれば、琴の音の微に聞ゆ、月を友なる怨聲は若しや我慕ひて

し人にもやと思へば、一朧の哀自ら催されて、ありし昔は流石に空ならず、あはれより

ても合はぬ片絲の我身の運は是非もなし、只塵の世に我思ふ人の長へに汚れざれ、戀の望を失ひても世を果敢なみし心の願、優に貴し。
千緒萬端の胸の思を一念「無情」の溶爐に溶し去て、澄む月に比べん心の明るさ、何れ終は同じ紙衣玉席、白骨を抱きて榮枯を計りし昔の夢、觀じ來れば、世に秋風の哀もなし、君も父も、戀も情も、さては世に産聲擧げてより二十三年の旦夕に疊み上げ折重ねし一切の衆縁、六尺の皮肉と共に夜半の嵐に吹き籠めて、行衛を知らぬ雲か煙、跡には秋深く夜靜にして互る雁の聲のみ高し。

第十四

治承三年五月熊野參籠の此方、日に増し重る小松殿の病氣、一門の頼、天下の望を繋ぐ御身なれば、さすがの横紙裂りける入道も心を痛め、此日朝まだき西八條より遙々の見舞に、内府も暫く寢處を出て、對面あり、半晌計り經て還り去りしが、鬼の様なる入道も稍涙含みてぞ見えにける、相隨ひし一門の人々の入道と共に還りし跡には、館の中最と靜にて小

松殿の側に侍る者は、御子維盛卿と足助二郎重景のみ、維盛卿は父に向ひ、

「先刻祖父禪門の御勸ありし宋朝渡來の醫師、聞くが如くんば世にも稀なる名手なるに、父上の拒み給ひしこそ心得ねし、

訝けに尋るを小松殿は打見やりて、はら／＼と涙を流し、

「形ある者は天命あり、三界の教主さへ、耆婆が藥にも及ばずして、跋提河の涅槃に入り給ひし、佛體ならぬ重盛、まして唯ならぬ身の業繋なれば、藥石如何でか治するを得べき唯父禪門の御身こそ痛ましけれ、位人臣を極め、一門の榮華は何れの國、何れの代にも例しなく、齡六十に越え給へば、出離生死の御營、無上菩提の願の外、何御不足のあれば煩惱劫苦の浮世に非道の權勢を貪り給ふ淺ましき、如何に少將、此頃の御舉動を何とか見つる、臣として君を押籠め奉るさへあるに、下民の苦を顧みず、遷都の企ありと聞く、そもや平安三百年の都を離れて何こに平家の盛あらん、父の非道を子として救ひ得ず、民の怨を眼のあたり見る重盛が心苦しき、思ひ遣れ、少將」
維盛卿も、傍に侍せる重景も首を垂れて默然たり、内府は病疲れたる身を脇息に持たせて

少しく笑を含みて重景を見やり給ひ、

「いかに二郎、保元の弓勢、平治の太刀風、今も草木を靡かす力ありや、盛と見ゆる世も何れ衰へる時はあり、末は濁りても濁れぬ源には、流も何時か清まんするぞ、言葉の旨を付り得しか、」

重景は愧はしげに首を俯し、

「如何でかは、」

と答へしまゝ、はかなくしく應せず、

折から一人の青侍廊下に手をつきて、

「齋藤左衛門、只今御謁見を給はりたき旨願候が、如何計らひ申さんや、」

と恐る／＼申上れば、小松殿、

「是へ連れ参れ、」

と言ふ、暫くして件の青侍に導かれ縁端に平伏したる齋藤茂頼、齡七十に近けれど、

猶髮黧として健なる老武者、右の鬢先より頬を掠めたる向疵に、栗毛の琵琶股叩いて物

語りし昔の武功忍ばれ、籠手指に肉落ちて節のみ高き太腕は、そも幾その人の首を切り落しけん、肩は山の如く張り、頭は雪の如く白し、

「久しや左衛門、」

小松殿聲懸け給へば、左衛門は窪みし兩眼に涙を浮べ、

「茂頼此の老年に及び、一期の耻辱、不忠の大罪、御詫申さん爲、御病體を驚せ参らせて候、」

小松殿眉を顰め何事ぞと問ひ給へば、茂頼は無念の顔色にて、

「愚息時頼、」

と言ひさして涙をはらくと流せば、重景は傍より膝進め、

「時頼殿に何事の候ひしぞ、」

「遁世致して候、」

是はと驚く維盛、重景、仔細如何にと問ひ寄るを應も得せず、やうやく涙を拭ひ、

「君が山なす久年の御恩に對し、一日の報効をも遂げず、猥に身を捨つる條、不忠とも不

義とも言はん方なき愚息が不所存、茂頼此期に及び、君に合はず面目も候はずし、

「言語に絶えたる亂心にも君が御事忘れずや、不忠を重ねる業とも知らで、残しありし此の一通、君の御名を染めれば、捨てんにも處なく、餘儀なく此に」、

と差上ぐるを小松殿は取上げて、

「こは予に残せる時頼が陳情よな」、

と言ひつゝ、繰りひろげ、つくづく讀了りて嘆息し給ひ、
「あゝ我れのみ浮世にてはなかりしか——時頼ほどの武士も物の哀には向はん刃なしと見ゆるぞ、左衛門、今は嘆きても及ばぬ事、予に於て聊か憾なし、禍福はあざなへる繩の如く、世は塞翁が馬、平家の武士も數多きに、時頼こそは中々に嫉しき程の仕合者ぞ、」

第十五

更闌けて、天地の間にそよとも音せぬ午夜の静けさ、やゝ傾きし下弦の月を追うて、冴え

澄める大空を渡る雁の影遙なり、ふけ行く夜に奥も表も人定りて、築山の木影に鐵燈の光のみ侘びしけなる御所の裏局、女房曹司の室々も、今を盛の寝入花、對屋を照せる燈の火影に迷うて、妻戸を打つ蟲の音のみ高し、廻廊のあなたに、蘭燈尙微なるは誰が部屋ならん、主は此夜深きにまだ寝もやらで、獨黒塗の小机に打ちもたれ、首を俯して物思はしけなり、側にある衣箱には紅梅蒔黄の三衣を打懸けて、焚き籠めし移り香に時ならぬ花を匂はせ、机の傍に据付けたる蒔繪の架には、色々の歌集物語を載せ、柱には一面の古鏡を掛けて、故とならぬ女の魂見えて床し、主が年の頃は十七八になりもやせん、身には薄色に草模様を染めたる小袿を着け、水際立ちし額より丈にも餘らん濡羽の黒髪、優に振分けて後に下げたる姿、優に氣高し、誰見ねども膝も崩さず、時々髪ほつれに小波を打たせて、吐く息の深けなるに、哀は是處にも漏れずと見ゆ、主は誰ぞ、是ぞ中宮が曹司横笛なる。其の振上ぐる顔を見れば、鬚眉の魂を蕩して、此世の外ならで六尺の體を天地の間に置き所無きまでに狂はせし傾國の色、凄き迄に美はしく、何を悲みてか、眼に湛ゆる涙の珠、海棠の雨も及ばず、膝の上に半繰りたる文は何の哀を籠めたるにや、打見やる眼元に無

限の情を含み、果は恰も悲に堪へざるものゝ如く、ブル／＼と身震ひして、文もて顔を掩ひ、泣音を忍ぶ様いぢらし。折から此方を指して近く人の足音に、横笛手早く文を巻き藏め、涙を拭ふ隙もなく、忍びやかに、

「横笛様、まだ御寝ならずや、」

と言ひつゝ、部屋の障子徐に開きて入來りしは、冷泉と呼ぶ老女なりけり。横笛は見るより、蕭れし今までの容姿忽ち變り、屹と容を改め、言葉さへ雄々しく、

「冷泉様には何の要事あれば夜半には來給ひし、」

と咎むるが如く問ひ返せば、ホ、と打笑ひ、

「横笛さま、心強きも程こそあれ、少しは他の情を酌み給へや、老枯れし老婆の御身に嫌はるゝは、可惜武士の戀死せん命を思へば物の數ならず、然るにても昨夜の返事、如何に遊ばすやら、」

「幾度申しても御返事は同じこと、あな蒼蠅き人や、」

懈しげに面を根らむる常の様子と打て變りし、さてもすけなき捨言葉に、冷泉訝しくは思へども流石は巧者、氣を外さず、

「其御心の強さに彌増す思に堪へ難き重景さま、世に時めく身にて、霜枯の夜毎に只一人、憂身をやつさるゝも戀なればこそ横笛様、御身はそれを哀とは思さずか、若氣の一徹は吾れ人共に思ひ返しの無きもの、可惜丈夫の焦れ死しても御身は見殺しにせらるゝ氣か、さりとは情なの御心や、」

横笛はさも懶けに、

「左様の事は横笛の知らぬこと、」

「またしてもうたてき事のみ、耻しと思ひ給うての事か、年弱き内は誰しも同じながら、斯くては戀は果てざるものぞ、女子の盛は十年とは無きものなるに、此上なき機會を取り外して、卒塔婆小町の故事も有る世の中、重景様は御家と謂ひ、器量と謂ひ、何不足なき好き縁なるに、何とて斯くは否み給ふぞ、扱は瀧口殿が事思ひ給うての事か、武骨一途の瀧口殿、文武兩道に秀で給へる重景殿に較ぶべくも非ず、況してや瀧口殿は何思

立ちてや、世を捨て給ひしと専ら評判高きをば、御身は未だ聞き給はずや、世捨人に情も義理も要らばこそ、花も實もある重景殿に只一言の色善き返り言をし給へや、聽て兵衛にも昇り給はんす重景殿、御身が行末は如何に幸ならん、未だ浮世慣れぬ御身なれば、思ひ煩ひ給ふも理なれども六十路に近き此の老婆、いかで爲悪しき事を申すべき、聞分け給ひしかや、顔差し覗きて猫撫聲、

「や、や」

と媚びるが如く笑を含みて袖を引けば、今まで應もせず俯き居たりし横笛は、引かれし袖を切るが如く打拂ひ、忽ち柳眉を逆立て、言葉鋭く、

「無禮にはお在さずや、冷泉さま、榮華の爲めに身を賣る遊女舞妓と横笛を思ひ給ふてか、但は此の横笛を飽くまで不義淫奔に陥れんとせらるゝにや、又しても問ひもせぬ人の批判、且は深夜に道ならぬ媒介、横笛迷惑の至、御歸あれ冷泉様、但し高聲擧げて宿直の侍を呼び起し申さんや、」

第十六

鋭き言葉に言懲されて、餘儀なく立上る冷泉を、引立てる計りに送り出し、本意無けに見返るを、見向もやらず、其儘障子を礎と締めて作るゝが如く座に就ける横笛、暫しは恍然として氣を失へる如く、いづことも無く詰と凝視め居しが、星の如き眼の裏には溢るゝばかりの涙を湛へ、珠の如き頬にはらくと振りかゝるをば拭はんとせず、蕾の唇惜氣もなく喰ひしぱりて、嚙み碎く息の切れぐに全身の哀を忍ばせ、はては耐へ得で、體を岸破とうつ伏して、人には見えぬ幻に我身ばかりの現を寄せて、よゝとばかりに泣き轉びつ、涙の中にかみ絞る袂を漏れて、幽に聞ゆる一言は、誰に聞かせんとてや、

「エ許し給はれし、

良しや眼前に屍の山を積まんとも涙一滴こほさぬ勇士に、世を果なむ迄に物の哀を感じさせ、夜毎の秋に浮身をやつす六波羅一の優男を物の見事に狂はせながら、
「許し給はれし、」

とは今更何の醉興ぞ、吁々然に非ず、何處までの浮世なれば、心にもあらぬ情なさに、互の胸の隔てられ、恨みしものは恨みしまゝ、恨みられし者は恨みられし儘に、あはれ、皮一重を塚に、身を換へ世を隔てゝも、吳越の思をなす、吾れ人の運命こそ果敢なけれ、横笛が胸の裏こそ、中々に口にも筆にも盡されね。

飛鳥川の明日をも咲たて、絶ゆる間も無く移り變る世の淵瀬に百千代を貫きて變らぬ者あれば、そは人の情にこそあんなれ、女子の命は只一の戀、あらゆる、此世の望、樂、さては優にやさしき月花の哀、何れ戀ならぬは無し、胸に燃る情の焰は、他を焼かざれば其身を焚かん、まゝならぬ戀路に世を仰ちて、秋ならぬ風に散りゆく露の命葉、或は墨染の衣に有漏の身を裹む、さては淵川に身を棄つる、何れか戀の炎に其軀を焼き盡して、残る冷灰の哀に非ざらんや、女子の性の斯く情深きに、いかで横笛のみ獨無情かるべきぞ。人知らぬ思に秋の夜半を泣きくらす、横笛が心を尋ねれば次の如くなりしなり。想ひ廻せばはや半歳の昔となりぬ、西八條の屋方に花見の宴ありし時、人の勸に黙し難く、舞ひ終る一曲の春鶯囀に、數ならぬ身の端なくも人に知らるゝ身となりては、小室の郷に

静けき春秋を娛みし身の心惑はるゝ事のみ多かり、見も知らず、聞きも習はぬ人々の人傳に送る薄色の折紙に、我を宛名の哀れの數々、都慣れぬ身には只胸のみ驚かれて、何と答へん術だに知らず、其儘心なく打過ぐる程に雲井の月の懸橋絶えしと思ひてや、心を寄する者も漸く尠くなりて、始に渝らす文をはこぶは只二人のみぞ残りける、一人は齋藤瀧口にして、他の一人は足助二郎なり、横笛今は稍々浮世に慣れて、風にも露にも餘所ならぬ思忍ばれ、墨染の夕の空に只一人、連れ互る雁の行衛消ゆるまで見送りて、思はず太息吐く事も多かりけり、二人の文を見るに付け、何れ劣らぬ情の濃かさに、心迷ひて一つ身の何れを夫とも別ち兼ね、夫とは無しに人の噂に耳を傾くれば、或は瀧口が武勇人に勝れしを譽むるも有れば、或は二郎が容姿の優しきを稱ふるも有り、共に小松殿の御内にて世にも知られし屈指の名士、横笛愈々心惑ひて、人の哀を二重に包みながら、浮世の義理の柵に何方へも一言の應へだにせず、無情と見ん人の恨を思ひやれば、身の心苦しきも數ならず、夜半の夢、屢々駭きて、涙に浮くばかりなる枕邊に、燵籠の匂のみ蕭やかなるぞ憐なる。或日のこと、瀧口時頼が発心せしこと、誰言ふとなく大奥に傳はりて、さなきだに口善惡

なき女房共、寄ると觸ると瀧口が噂に、横笛轟く胸を抑へて蔭ながら様子を聞けば、情なき戀路に世を果なみての業と言ひ囁すに、人の手前も打忘れ、覺えず「そは誠か」と力を入れて尋ねれば、女房共「罪造りの横笛殿、可惜勇士の木の端とせし」と人の哀を面白げなる高笑に、是はとばかり、早速のいらへもせず、ツと己が部屋に走り歸りて、終日夜もすがら、泣暮し泣明しぬ。

第十七

「罪造の横笛殿、あたらし勇士に世を捨てさせし、あゝ半戯に、半法界悋氣の此の一語、横笛が耳には如何に響きしぞ、戀に望を失ひて浮世を捨てし男女の事、昔の物語に見し時は世に痛はしき事に覺えて、草色の袂に露の哀を置きし事ありしが、猶現ならぬ空事とのみ思ひきや、今も眼前かゝる悲に遇はんとは、而かも世を捨てし其人は命を懸けて己を戀ひし瀧口時頼、世を捨てさせし其人は可愛とは思ひながらも世の關守に隔てられて無情しと見せたる己、横笛ならんとは、餘の事に左右の

考も出でず、夢幻の思して身を小机に打伏せば、

「可惜武士に世を捨てさせし、

と怨むが如く、嘲るが如き聲、何處よりもなく我耳にひびきて、其度毎に總身宛然水を浴びし如く、心も體も凍らんばかり、襟を傳ふ涙の雫のみさすが哀を隠し得ず。

搔亂れたる心、辛う我に歸りて、熟々思へば、世を捨つるとは輕々しき戯事に非ず、瀧口殿は六波羅上下に名を知られたる屈指の武士、希望に満てる春秋長き行末を二十幾年の男盛に斷截りて、樂しき此世を外に身を佛門に歸し給ふ、世にも憐の事にこそ、數多の人に優りて、君の御覺殊に愛たく一族の譽を双の肩に擔うて、家には其子を杖なる年老いたる親御もありと聞く、他目にも數あるまじき君父の恩義、惜氣もなく振捨て、人の譏り、世の笑を思ひ給はで、弓矢とる御身に瑜珈三密の嗜は、世の無常を如何に深く觀じ給ひけるぞ、あゝ是れ皆此身、此横笛の爲せし業、刃こそ當てね、可惜武士を手を掛けしも同じ事、——思へば思ふほど、乙女心の胸塞りて泣くより外にせん術も無し。道入口 町々、協はずば世を捨てんまで、我を思ひくれし人の情の程こそ中々に有り難けれ、儘な

らぬ世の義理に心ならずとは云ひながら、斯る誠ある人に、只一言の返事だにせざりし我こそ今更に悔しくも亦罪深けれ、手篋の底に秘め置きし瀧口が送りし文、涙ながらに取出して、心遣りにも繰返せば、先には斯までとも思はざりしに、今の心に讀もて行く一字毎に腸も千切るゝばかり、百夜の榻の端がきに今や我や數書くまじ、只つれなき浮世と諦めても、命ある身のさすがに露とも消えやらず、我思ふ人の忘れ難きを如何にせん、——など書き聯ねたるさへあるに、よしや墨染の衣に我哀をかくすとも、心なき君には上の空とも見えん事の口惜しさ、など碗の水に泪落ちてか、薄墨の文字定かならず、つら／＼數ならぬ賤しき我身に引き較べ、彼を思ひ此を思へば、横笛が胸の苦しさは譬へんに物もなし、世を捨てん途に我を思ひ給ひし瀧口殿が誠の情と並ぶれば、重景が總路は物ならず、況して日頃より文傳へする冷泉が、ともすれば瀧口殿を悪し様に言ひなせしは、我を誘はん腹黒き人の計略ならんも知れず、

58 斯く思ひ來れば、重景の何となう疎ましくなるに引き換へて、瀧口を憐むの情愈々切にして、世を捨て給ひしも我故と、思ふ心の身にひし／＼と當りて立ても坐りても居堪らず、

窓打つ落葉のひゞきも、蟲の音も我を咎むる心地して、繰擧げし文の文字は宛然我を睨むが如く見ゆるに、目を閉ぢ耳を塞ぎて机の側に伏し轉べば、

「あたら武士を汝故に」、

といづこともなく嘯く聲、心の耳に聞えて、胸は刃に割かるゝ思ひ、あはれ横笛一夜を惱み明して、朝日影窓に眩き頃、ふらくと縁前に出れば、憎くや、檐端に歌ふ鳥の聲さへ、己が心の迷から、

「汝のゑ、汝のゑ」、

と聞ゆるに覺えず顔を反けて、あゝと溜息つけば、驚きて起つ群雀、行衛も知らず飛び散りたる跡には、秋の朝風音寂しく、残んの月影夢の如く淡し。

第十八

女子こそ世に優しきものなれ、戀路は六つに變れども、思はいづれ一つ魂に映る哀の影とかや、つれなしと見つる浮世に長生へて、朝顔の夕を咲たぬ身に百年の末懸けて、覺東

なき朝夕を過すも胸に包める情の露あればなり、戀か、あらぬか、女子の命はそも何に噓ふべき、人知らぬ思に心を傷りて、あはれ一山風に跡もなき、東岱前後の烟と立昇るうら弱き眉目好き處女子は、年毎に幾何ありとするや、世の隨意ならぬは是非もなし、只いささ川、底の流の通ひもあらで、人はいざ我にも悟らで、世を果なむこそ浮世なれ。然れば横笛、我故に武士一人に世を捨てさせしと思へば乙女心の一徹に思返さん術もなく、此朝夕は只泣暮せども、影ならぬ身の失せもやらず、せめて嵯峨の奥にありと聞く瀧口が庵室に訪れて我誠の心を打明さばやと、さかしくも思決めつ、誰彼時に紛れて只一人、うかれ出でけるこそ殊勝なれ。

頃はなが月の中旬すぎ、入日の影は雲にのみ残りて野も山も薄墨を流せしが如く、月未だ上らざれば、星影さへも最と稀なり、袂に寒き愛宕嵐しに秋の哀は一入深く、まだ露下ぬ野面に我袖のみぞ、早や沾ひける、右近の馬場を右手に見て、何れ昔は花園の里、霜枯れし野草を心ある身に踏み摧きて、太秦わたり辿り行けば、峰岡寺の五輪の塔、夕の空に形のみ見ゆ、やがて月は上りて桂の川の水烟、山の端白く閉罩めて、尋ねる方は臙にして見

え分かず、素より慣れぬ徒歩なれば、數たび或は里の子が落穂拾はん畔路にさすらひ、或は露に伏す鶉の床の草村に立迷うて、絲より細き蟲の音に、覺束なき行末を啣てども、問ふに聲なき影ばかり、名も懐しき梅津の里を過ぎ、大堰川の邊を沿ひ行けば、河風寒く身に染みて、月影さへもわびしけなり、裾は露、袖は涙に打蕭れつ、霞める眼に見渡せば、嵯峨野も何時しか奥になりて、小倉山の峯の紅葉、月に黒みて、釋迦堂の山門木立の間に鮮なり、噂に聞きしは嵯峨の奥とのみ、何れの院とも坊とも知らざれば、何を便に尋ねべき、燈の光を的に數も無き在家を彼方此方に彷徨ひて問ひけれども、絶えて知る者なきに、愈々心惑ひて只茫然と野中にのみみける、折から向うより庵僧とも覺しき一個の僧の通りかゝれるに、横笛渡に舟の思して、

「慮外ながら此わたりの庵に近き頃様を變へて都より來られし俗名齋藤時頼と名告る年壯き武士のお在さすや、」

聲震はして尋ねれば、件の僧は横笛が姿を見て暫し首傾けしが、
「露しけき野を女性の唯一人、さてもノ、痛はしき御事や、けに然る人ありとこそ聞きつ

れど、まだ其人に遇はざれば、御身が尋ぬる人なりや、否やを知り難し、

「して其人は何處にお在する、」

「そは此處より程遠からぬ往生院と名くる古き僧庵に、」

僧は最と懇ろに道を教ふれば、横笛世に嬉しく思ひ、禮もいそぐ、別れ行く後影、鄙には見なれぬ緋の袴に、夜目にも輝く五柳の一重、件の僧は暫したゝすみて訝しげに見送れば、焚きこめし異香、吹き來る風に時ならぬ春を匂はするに、俄に忌はしげに顔背けて小走りに立去りぬ。

第十九

斯くて横笛は教へられしまゝに辿り行けば、月の光に影暗き、杜の繁みを徹して微に燈の光見ゆるは、けに古りし庵室と覺しく、隣家とても有らざれば、関として死せるが如き夜陰の静けさに、振鈴の響、さやかに聞ゆるは、若しや尋ぬる其人かと思へば、思設けし事ながら、胸轟きて急ぎし足も思はず緩みぬ、思へば現とも覺えて此處までは來りしものゝ

何と言うて世を隔てたる門を敲かん、我眞の心をば如何なる言葉もて打明けん、うら若き女子の身にて夜を冒して來つるをば、蓮葉の者と卑下み給はん事もあらば如何にすべき、將また千束の文に一言も返さざりし我無情を恨み給はん時、いかに應へすべき、など思ひ惑ひ、耻しさも催されて、御所を拔出でし時の心の雄々しさ、今更怪まるゝばかりなり、斯くて果つべきに非ざれば、辛く我と我身に思決め、ふと首を擧ぐれば、振鈴の響耳に迫りて、身は何時しか庵室の前に立ちぬ、月の光にすかし見れば、半は頽れし門の廂に、蟲食みたる一面の古額、文字は危げに往生院と讀まれたり。

横笛四邊を打見やれば、八重葎茂りて門を閉ぢ、拂はぬ庭に落葉積りて秋風吹きし跡もなし、松の袖垣隙あらはなるに、葉は枯れて蔓のみ残れる蔦生えかゝりて、古き梢の夕嵐、軒もる月の影ならでは訪ふ人も無く荒れ果てたり、軒は朽ら柱は傾き、誰棲みぬらんと見ても物憂けなる宿の態、扱も世を無常と觀じては斯る侘しき住居も、大梵高臺の樂に換へらるゝものよと思へば、主の貴さも彌増して、今宵の我身や、愧しく覺ゆ、庭の松が枝に釣したる、仄暗き鐵燈籠の光に軒前を照させて、障子一重の内には、振鈴の聲、急かず、

緩まず、四曼不離の夜毎の行業に慣そめてか、籬の蟲の駭かん様も見えず、横笛今は心を定め、ほとくと門を音つるれども答なし、玉を延べたらん如き纖腕、痲るゝばかりに打たけども應せん氣はひも見えず、實に佛者は行の半には王侯の召にも應ぜずとかや、我ながら心なかりしと、暫し門下にぞみて、鈴の音の絶えしを待ちて復び門を敲けば、内には主の聲として、

「世を隔てたる此庵は夜陰に訪はるゝ覺無し、恐らく門違にても候はんか」、横笛潜めし聲に力を入れて、

「大方ならぬ由あればこそ夜陰に御業を驚し參らせしなれ、庵は往生院と覺ゆれば、主の御身は、小松殿の御内なる齋藤瀧口殿にてはお在さすや」、

「如何にも某が世に在りし時の名は齋藤瀧口にて候ひしが、そを尋ねらるゝ御身はそも何人」、

妾こそは中宮の御所の曹司、横笛と申すもの、隨意ならぬ世の義理に隔てられ、世にも厚き御情に心にも無き情なき事の數々、只今の御身の上と聞侍りては、悲しさ苦さ、女

子の狭き胸一つには納め得ず、知られで永く已みなんこと朽惜しく、一には妾が眞の心を開明け、且は御身の恨の程を承はらん爲めに茲まで迷ひ來りしなれ、こゝ開け給へ瀧口殿」、

言ふと其儘門の扉に身を寄せて聲を潜びて泣居たり。瀧口はしばらく應へせず、やゝありて

「如何に女性、我れ世に在りし時は、御所に然る人あるを知りし事ありしが、我知れる其人は我を知らざる筈なり、されば今宵我を訪れ給へる御身は我知れる横笛にてはよもあらじ、良しや其人なりとても、此世の中に心は死して、残る體は空蟬の我、我に恨あればとて、そを言ふの要もなく、よし又人に誠あらばとて、そを聞かん願もなし、一切諸縁に離れたる身、今更返らぬ世の浮事を語り出でゝ何かせん、聞き給へや、女性、何事も過ぎにし事は夢なれば、我に恨ありとな思ひ給そ、己に情なき者の善智識となれる例世に少からず、誠に道に入りし身のそを恨みん謂れやある、されば遇ふて益なき今宵の我、唯何事も言はず、此儘歸り給へ、一言とは申すまじきぞ、聞き分け給ひしか、横笛殿」、

因果の中に哀を含みし言葉のふしく、横笛が悲しさは百千の恨を聞くよりもまさり、

「其の御語、いかで仇に聞侍るべき、只親にも許さぬ胸の中、女子の耻をも顧みず、聞え参らせんずるをば、聞かん願なしと仰せらるゝこそ恨なれ、情なかりし昔の報とならば、此身を千々に刻まるゝとも露厭はぬに、慈ひ仇を情の御言葉は、心狭き妾に耻て死ねとの御事か、無情かりし妾こそ憎め、可惜武士を世の外にして、様を變へ給ふことの恨めしくも亦痛はしけれ、茲開け給へ、思ひ詰めし一念、聞き給はずとも言はでは已まじ、

喃瀧口殿、こゝ開け給へ、情なきのみが佛者かはし、
喃喃と門を叩きて今や開くると待侘ぶれども、内には寂然として聲なし、やゝありて、人の立居する音の閉ゆるに、嬉しやと思ひきや、振鈴の響起りて、りん／＼と鳴渡るに、是はと駭く横笛が呼べども叫べども答ふるものは庭の木立のみ。

66 月稍西に傾きて、草葉に置ける露白く、桂川の水音幽に聞えて、秋の夜寒に立つ鳥もなき

眞夜中頃、往生院の門下に蟲と共に泣き暮したる横笛、哀れや、紅花緑葉の衣裳、涙と露に絞るばかりになりて、濡れし袂に裏みかねたる恨のかす／＼は、そも何處までも浮世ぞや、我から踏める己が影も、萎るゝ如く思ほへて、情なき人に較べては月こそ中々に哀深けれ、横笛今はとて、涙に曇る聲張上げて、

「喃、瀧口殿、葉末の露とも消えずして今まで立ちつくせるも、妾が赤心打明けて、許すとの御身が一言聞かんが爲、夢と見給ふ昔ならば、情なかりし横笛とは思ひ給はざるべきに、など斯くは慈悲なくあしらひ給ふぞ、今宵ならでは世を換へても相見んことの有りとも覺えぬに、喃瀧口殿、

春の花を欺く姿、秋の野風に暴して、恨みわびたる其様は、如何なる大道心者にても、心動かん計なるに、峰の嵐に埋れて嘆の聲の聞えぬにや、鈴の音は調子少しも亂れず、行ひすましたる瀧口が心翻るべくも見えざりけり。

道入口瀧
何とせん術もあらざれば、横笛は泣く／＼元來し路を返り行きぬ、氷の如く澄める月影に道芝の露つらしと拂ひながら、ゆりかけし丈なる髪、優に波打たせながら、晝にある如き

乙女の歩姿は、葛飾の眞間の手古奈が昔忍はれて、斯くもあるべしや、あはれ横笛、乙女心の今更に、命に懸けて思ひ決めしこと空となりては、歸り路に足進まず、我やかたき、人や無情き、嵯峨の奥にも秋風吹けば、いづれ浮世には漏れざりけり。

第二十一

胸中一戀字を擺脱すれば、便ち十分爽淨、十分自在、人生最も苦しき處、只是れ此心、然ればにや失意の情に世をあじきなく觀じて、嵯峨の奥に身を捨てたる齋藤時頼、瀧口入道と法の名に浮世の名残を留むれども、心は生死の境を越て、瑜珈三密の行の外、月にも露にも唱ふべき哀は見えず、荷葉の三衣、秋の霜に堪難けれども、一杖一鉢に清捨を求むるの外他に望なし、實にや輪王位高けれども七寶終に身に添はず、雨露を凌がぬ軒の下にも圓頓の花は匂ふべく、眞如の月は照すべし、且に稽古の窓に凭れば、垣を掠めて塵く霧は不斷の烟、夕に讃仰の嶺を攀つれば、壁を漏れて照る月は常住の燭、晝は小室、太秦、梅津の邊を巡錫して夜に入れば、十字の繩床に結跏趺坐して唵阿の行業に夜の白むを知ら

ず、されば僧坊に入りてより未だ幾日も過ぎざるに、苦行難業に色黒み、骨立ち、一目にては十題判断の老登料とも見えつべし、あはれ、厚塗の立烏帽子に鬢を撫上げし昔の姿、今安くにある、今年二十三の壯年とは如何にしても見えざりけり。

顧みれば瀧口、性質にもあらで形容邊幅に心を惱めたりしも戀の爲なりき、仁王とも組まんす六尺の丈夫、體のみか、心さへ衰へて、めしき哀に弓矢の耻を忘れしも戀の爲なりき、思へば戀てふ悪魔に骨髄深く魅入られし身は、戀と共に浮世に斃れんか、將た戀と共に世を捨てんか、擇ぶべき途、只此二つありしのみ、時頼世を無情と觀じては、何恨むべき物ありとも覺えず、武士を去り、弓矢を捨て、君に離れ、親を辭し、一切衆縁を擧げ盡して戀てふ悪魔の犠牲に供へ、跡に残るは天地の間に生れ出でしまゝの我身、瀧口時頼、命と共に受繼ぎし活達の氣風再び爛漫と咲出で、容こそ變れ、性質は戀せぬ前の瀧口に少しも遠はず、名利の外に身を處けば、自ら嫉妬の念も起らず、憎惡の情も萌さず、山も川も木も草も、愛らしき、垂髻も醜き老婆も、我に恵む者も我を賤しむ者も、我には等しく可愛らしく覺えぬ、けに一視平等の佛眼には四海兄弟と見えしとかや、病めるものは之を慰

め、貧しき者は之に分ち、心曲りて郷里の害を爲す者には、因果應報の道理を論し、凡て人の爲め、世の爲めに益あることは躊躇ふことなく爲し、絶えて彼此の差別なし、然れば瀧口が錫杖の到る所、其風を慕ひ、其徳を仰がざるはなかりけり、或時は里の子供等を集めて、昔の剛者の物語など、面白く言ひ聞かせ、喜び勇む無邪氣なる者の様を見て呵々と打笑ふ様、二十三の瀧口、何日の間に習ひ覚えしか、宛然老翁の孫女を弄ぶが如し。斯くて風月ならで訪ふ人も無き嵯峨の奥に、世を隔てゝ安らげき朝夕を娛み居しに、世に在りし時は弓矢も譽も打捨て、狂ひ死に死なんまで焦れし横笛、親にも主にも振かへて戀の奴となりしまで慕し横笛、世を捨て様を變へざれば、吾から懸けし戀の絆を解く由も無かりし横笛、其横笛の音つれ來りしこそ意外なれ、然れども瀧口、口にくはへし松が枝の小搖ぎも見せず、見事振鈴の響に耳を澄して、含識の流、さすがに濁らず、思へば悟道の末も稍頼もしく、灰白む窓に、傾く月を應きて、冷に打笑める顔は天晴大道心者に成りすましたり。

* * * * *

71 さるにても横笛は如何になしつるや、往生院の門下に一夜を立明して、曉近く御所に還り、後の二三日は何事も無く暮せしが、間もなく行衛知れずなりて、其部屋の壁には日頃手慣れし古桐の琴、主待ちけに見ゆるのみ。

第二十二

或日、天長閑に晴れ渡り衣を返す風寒からず、秋蟬の翼暖む小春の空に、瀧口すどろに心浮かれ常には行かぬ桂、鳥羽わたり巡錫して、嵯峨とは都を隔てゝ南北、深草の邊に來りける、此あたりは山近く林密にして、立田の姫が織り成せる木々の錦、二月の花よりも紅にして、匂あましかばと惜まるゝ美しさ、得も言はれず、薪採る翁、牛ひく童、餘念無く歌ふ節、餘所に聞くだに樂しげなり、瀧口行々四方の景色を打眺め、稍々疲を覺えたれば、とある路傍の民家に腰打掛けて、暫く休らひぬ、主婦は六十餘とも覺しき老婆なり、一碗の白湯を乞ひて喉を濕し、何くれとなき浮世話の末瀧口、「愚僧が庵は嵯峨の奥にあれば、此わたりには今日が初めて、何處にも土地珍しき話一つ

はある物ぞ、何れ名にし負はゞ、哀も一入深草の里と覺ゆるに、話して聞かせずや、
老女は笑ひながら、

「かゝる片邊なる鄙には何珍しき事とは無けれども、其の哀にて思ひ出せし、世にも哀なる一つの話あり、問ひ給ひしが因果、事長くとも聞き給へ、御身の茲に來られし途すがら、溪川の有る邊より、山の方にわびしけなる一棟の僧庵を見給ひしならん、其庵の側に一つの小やかなる新塚あり、主が名は言はで此の里人は只戀塚戀塚と呼びなせり、此の戀塚の謂に就きて最とも哀なる物語の候なり」

「戀塚とは餘所ならず床しき思す、剃らぬ前の我も戀塚の主に半はなりし事もあれば、言ひつゝ瀧口は呵々と打笑へば、老婆は打消し、

「否笑ふことでなし、此月の初頃なりしが、晝にある様な上藤の如何なる故ありてか、かの庵室に籠りたりと想ひ給へ、花ならば蕾、月ならば新月、いづれ末は玉の輿にも乗るべき人が、品もあらんに世を外なる尼法師に様を變へたるは、慕ふ夫に別れてか、情なき人を思ふてか、何の途、戀故ならんとの噂、薪とる里人の話によれば、庵の中には玉

を轉ばす如き柔しき聲して、讀經の響絶ゆる時なく、折々闕伽の水波みに、谷川に下りし姿見たる人は、天人の羽衣脱ぎて袈裟懸けしとて、斯くまで美しからじなど罵り合へりし、心なき里人も世に痛はしく思ひて、色々の物など送りて慰むる中、かの上藤は思重りてや、病みつきて程も經ず返らぬ人となりぬ、言ひ残せし片言だに無ければ、誰も尼になるまでの事の由は知らず、里の人々相集りて涙と共に庵室の側に心ばかりの埋葬を營みて卒塔婆一基の主とはせしが、誰言ふとなく戀塚々々と呼びなしぬ、來慣れぬ此里に偶々來て此話を聞かれしも他生の因縁と覺ゆれば、歸途には必らず立寄りて一片の回向をせられよ、いかに哀なる話しに候はずや、

老婆は話し了りて、燃えぬ薪の烟に咽びて、涙押しひぬ、瀧口もやゝ哀を催して、

「そは氣の毒なる事なり、其上藤は何處の如何なる人なりしぞ、
「人の噂に聞けば御所の曹司なりとかや、
「ナニ曹司とや、其名は聞き知らずや、

「然れば、最とやさしき名と覺えしが、何とやら、——おゝそれ慥に横笛とやら言ひし、

嵯峨の奥に戀人の住めると人の話なれども、定かに知る由も無し、聞けば御僧の坊も同じ嵯峨なれば、若し心當の人もあらば、此事傳へられよ、同じ世に在りながら、斯る婉やかなる上臈の様を變へ、思ひ死するまでに情なかりし男こそ、世に罪深き人なれ、他し人の事ながら誠なき男見れば取りも殺したく思はるゝよし、餘所の恨を身に受けて、他とは思はぬ吾が哀れ、老いても女子は流石にやさし、瀧口が様見れば、先の快けなる氣色に引きかへて首を垂れて物思の體なりしが、やゝありて、
 「あゝ餘に哀なる物語に、法體にも耻ぢず、思はず落涙に及びたり、主婦が言に従ひ、愚僧は之より其戀塚とやらに立寄りて、暫し回向の杖を停めん」、
 網代の笠に夕日を負うて立去る瀧口入道が、後姿、頭陀の袋に麻衣、鐵鉢を掌に捧けて、八つ目のわらんづ踏にじる、形は枯木の如くなれども、息ある間は血も有り涙もあり。

第二十三

深草の里に老婆が物語、聞けば他事ならず、いつしか身に振りかゝる哀の露、泡沫夢幻

と悟りても、今更驚かれぬる世の起伏かな、様を變へしとはそも何を觀じての發心ぞや、憂に死せしとはそも誰にかけたる恨ぞあゝ横笛、吾れ人共に誠の道に入りし上は、影よりも淡き昔の事は問ひもせじ、語りもせじ、圓伽の水汲絶えて流に宿す影止らず、觀經の音已みて梢にとまる響無し、いづれ業繫の身の、心と違ふ事のみぞ多かる世に夢中の夢を啣ちて我れ何にかせん。

瀧口入道、横笛が墓に来て見れば、墓とは名のみ、小高く盛りし土饅頭の上に一片の卒塔婆を立てしのみ、里人の手向けしにや、半枯れし野菊の花の仆れあるも哀れなり、四邊は斷草離々として趾を着くべき道ありとも覺えず、荒れすさぶ夜々の嵐に、ある程の木々の葉吹落されて、山は面瘦せ、森は骨立ちて目もあてられぬ悲惨の風景、聞きしに増りて哀なり、あゝ是ぞ横笛が最後の住家よと思へば流石の瀧口入道も法衣の袖を絞りあへず、世にありし時は花の如き艶やかなる乙女なりしが、一旦無常の嵐に誘はれては、いづれ遁れぬ古墳一墓の主かや、そが初めの内こそ憐れと思ひて香花を手向くる人もあれ、やがて星移り歳経れば、冷え行く人の情に隨つて願ふ人も無く、あはれ何れをそれと知る由もなく荒

れ果てなんす、思へば果敢な吾れ人が運命や、都大路に世の榮華を嘗め盡すも、賤が伏屋に畦の落穂を拾ふも、暮すは同じ五十年の夢の朝夕、妻子珍寶及王位、命終る時に隨ふものはなく、野邊より那方の友とては、結脈一つに珠數一聯のみ、之れを想へば世に悲むべきものも無し、瀧口衣の袖を打はらひ墓に向て合掌して言へらく、

「形骸は良しや冷土の中に埋れても、魂は定かに六尺の上に聞しめされん、そもや、御身と我れ、時を同うして此世に生れしは過世何の因、何の果ありてぞ、同じ哀を身に擔うてそれを語らふ折もなく世を隔て様を異にして此悲むべき對面あらんとは、そも又何の業、何の報ありてぞ、我は世に救を得て、御身は憂きに心を傷りぬ、思へば三界の火宅を逃れて、聞くも嬉しき眞の道に入りし御身の、欣求淨土の一念に浮世の絆を解き得ざりしこそ恨なれ、戀とは言はず、情とも謂はず、遇ふや柳因、別るゝや絮果、いづれ迷は同じ流轉の世事、今は言ふべきこと有りとも覺えず、只此上は夜毎の松風に御魂を澄されて、未來の解脱こそ肝要なれ、仰ぎ願はくは三世十方の諸佛、愛護の御手を垂れて出離の道を得せしめ給へ、過去精靈、出離生死、證大菩提、」

生ける人に向へるが如く言ひ了りて、暫黙念の眼を閉ぢぬ、花の本の半日の客、月の前の一夜の友も、名残は惜まるゝ習なるに、一向所感の身なれば、先の世の法縁も淺からず思はれ、流石の瀧口、限無き感慨胸に溢れて、轉た今昔の情に堪へず、今かゝる哀を見んことは、神ならぬ身の知る由もなく、嵯峨の奥に夜半かけて、迷ひ來りし時は、我情なくも門をば開けざりき、耻をも名をも思ふ違なく、様を變へ身を殺す迄の哀の深さを思へば、我こそ中々に罪深かりけれ、あゝ横笛、花の如き姿今いづこに在る、菩提樹の蔭、明星額を照す邊、耆闍屈の中香烟肘を繞るの前、昔の夢を空と見て猶我ありしことを思へるや否、逢ひ見しとはあらずに別れ路つらく覺ゆることの我ながら訝しさよ、思胸に迫りて、叶々と吐く太息に覺えず我に還りて首を擧れば日は半西山に入りて、峰の松影色黒み、落葉を誘ふ谷の嵐、夕ぐれ寒く身に浸みて、ばらくと顔打つものは露か時雨か。

第二十四

其年の秋の暮つかた、小松の内大臣重盛、豫ての所勞重らせ給ひ、御年四十三にて薨去あ

り、一門の人々、恩顧の侍は言ふも更なり、都も鄙もおしなべて、悼み惜まざるはなく、町家は商を休み、農夫は業を廢して哀號の聲到る處に充らぬ、入道相國が非道の舉動に御恨を含みて時の亂を願はせ給ふ法住寺殿の院と、三代の無念を吞て只すら時運の熟すを待る源氏の殘黨のみ、内府が遠逝を喜べりとぞ聞えし。

士は己を知れる者の爲に死せんことを願ふとかや、今こそ法體なれ、ありし昔の瀧口が、此君の御爲ならばと誓ひしは天が下に小松殿只一人、父祖十代の御恩を集めて此君一人に報し參らせばやと、風の旦、雪の夕、蛭卷のつかの間も忘るゝ隙も無かりしが、思ひもかけぬ世の波風に身は嵯峨の奥に吹き寄せられて、二十年來の志も皆空事となりける、世に望なき身ながらも、我から好める斯る身の上に君の思召の如何あらんと、折々思出されては流石に心苦しく、只長き將來に、覺束なき機會を頼みしのみ、小松殿逝去と聞きてはそれも協はず、御名殘今更に惜まれて、其日は一日坊に閉籠りて、内府が平生など思出で、回向三昧に餘念なく、夜に入りては讀經の聲いと蕭やかなりし。

是を思ふに、身一つに降かゝる憂き事の露しけき今日此ごろ、瀧口三衣の袖を絞りかね、法體の今更遺瀾なきぞいぢらし、實にや縁に従て一念頓に自理を悟れども、曠劫の習氣は一朝一夕に淨むるに由なし、變相殊體に身を困めて、有無流轉と觀じても、猶此世の悲哀に離れ得ざるぞ是非も無き。

徳を以て將人を以て、柱とも石とも頼まれし心松殿、世を去り給ひしより、誰言ひ合さねども、心有る者の心にかゝるは、同じく平家の行末なり、四方の波風靜にして、世は盛りとこそは見ゆれども、入道相國が多年の非道によりて、天下の望已に離れて敗亡の機はや熟してぞ見えし、今にも蛭が小島の頼朝にても、筑波おろしに旗揚げんには、源氏譜代の恩顧の士は言はずもあれ、苟も志を當代に得ず、怨を平家に衝める者、響の如く應じて關八州は日ならず平家の有に非ざるん、萬一斯る事あらんには、大納言殿(宗盛)は兄の内府にも似ず、暗弱の性質なれば、素より物の用に立つべくもあらず、御子三位の中將殿(維盛)は歌道より外に何長じたる事無き御身なれば、紫宸殿の階下に源家の嫡流と相挑みし父の獅の勇膽ありとしも覺えず、頭の中將殿(重衡)も管絃の奏こそ巧なれ、千軍萬馬の

間に立ちて采配とらん器に非ず、只數多き公卿殿上人の中にも、知盛、教經の二人こそ天晴未來事ある時の大將軍と覺ゆれども、これとても螺鈿の細太刀に風雅を誇る六波羅上下の武士を如何にするを得べき、中には越中次郎兵衛盛次、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清など名たる剛者なきにあらねど、言はゞ之れ匹夫の勇にして大勢に於て元より益する所なし、思へば風前の燈に似たる平家の運命かな、一門上下花に酔ひ月に興じ、明日にも覺めなんす榮華の夢に、萬代かけて行末祝ふ、武運の程ぞ浅ましや。入道ならぬ元の瀧口は平家の武士、忍辱の袈裟も主家興亡の夢に襲はれては今にも掃魔の堅甲となりかねまじき風情なり。

第二十五

其年も事無く暮れて、明くれば治承四年、淨海が暴虐は猶已ます、殿とは名のみ蜘蛛手結びこめぬばかりの鳥羽殿には、去年より法皇を押籠め奉るさへあるに、明君の聞き高き主上をば、何の恙もお在さぬに、是非なくおろし參らせ、清盛の女が腹に生れし春宮の今年僅

に三歳なるに御位を譲らせ給ふ、あはれ聞きも及ばぬ奇怪の讓位かなとおもはぬ人ぞ無かりける、一秋毎に細りのく民の竈に立つ煙、それさへ恨と共に高くは上らず、野邊の草木にのみ春は歸れども、世はおしなべて秋の暮、枯枝のみぞ多かりける、元より民の疾苦を顧みるの入道ならねば、野に立てる怨聲を何處の風とも氣にかけず、或は嚴島行幸に一門の榮華を傾け盡し、或は新都の經營に近畿の人心を騒がせて少しも意に介せず、世に恨み義に勇みて源三位、數も無き白旗殊勝にも宇治川の朝風に翻せしが、脆くも破れて空しく一族の血沙を平等院の夏草に染めたりしは、諸國源氏が旗揚の先陣ならんとは、平家の人々いかで知るべき、高倉の宮の宣旨、木曾の北、關の東に普く渡りて、源氏興復の氣運漸く迫れる頃、入道は上下萬民の望に背き、愈々都を攝津の福原に遷し、天下の亂、國土の騒を露顧みざるは、抑も之れ滅亡を早むるの天意か、平家の末はいよく遠からじと見えにけり。

右兵衛佐(頼朝)が旗揚に草木と共に靡きし關八州、心ある者は今更とも思はぬに、大場の三郎が早馬きゝて、夢かと驚きし平家の殿原こそ不覺なれ、討手の大將、三位中将維盛

卿 赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧は天晴平門公子の容儀に風雅の銘を打たれども、富士河の水鳥に立つ足もなき十萬騎は、關東武士の笑のみに非ず、前の非を悟りて舊都に歸り、さては奈良炎上の無道に餘忿を漏せども、源氏の勢は日に加はるばかり、覺東なき行末を夢に見て其年も打過ぎつ、治承五年の春を迎ふれば、世愈々亂れ、都に程なき信濃には、木曾の次郎が兵を起して、兵衛の佐と相應じて其勢破竹の如し、傾危の際、老ても一門の支柱となれる入道相國は、折柄怪しき病に死し、一門狼狽して爲す所を知らず、墨股の戦に少しく會稽の耻を雪ぎたれども、新中納言(知盛)軍機を失して必勝の機を外し、木曾の壓と頼みし城の四郎が北陸の勇を擧りし四萬餘騎、餘五將軍の遺武を負ひながら、横田河原の一戦に、脆くも敗れしに驚きて、今はとて平家最後の力を盡して北國に打向ひし十五萬餘騎、一門の存亡を賭せし俱利伽羅、篠原の二戦に、哀れや残り少なに打なされ、背疵抱へて、すごとく都に歸り來りし打漏されの見苦しさ、木曾は愈々勢に乗りて、明日にも都に押寄せんす風評、平家の人々は、今は居ながら生る心地もなく、然りとて敵に向て死する力もなし、木曾をだに支へ得ざるに、關東の頼朝來らば如何にすべき、或は都を枕に

して討死すべしと言へば、或は西海に走て再擧を謀るべしと説き、一門の評議まら／＼にして定らず、前には邦家の急に當りながら、後には人心の赴く所一ならず、何れ變らぬ亡國の末路也けり。

平和の時こそ供花焼香に經を翻して、利益平等の世とも感せめ、祖先十代と己が半生の歴史とを刻みたる主家の運命日に非なるを見ては、眼を過ぐる雲煙とは瀧口いかで看過するを得ん、人の噂に味方の敗北を聞く毎に、無念さ、もどかしさに耐へ得ず、双の腕を扼して、法體の今更、變へ難きを恨むのみ。

或日瀧口關伽の水汲まんとて、まだ明けやらぬ空に往生院を出で、近き泉の方に行きしに、都六波羅わたりと覺しき方に、一道の火焰天を焦して立上れり、そよとだに風なき夏の曉に、遠く望まば只朝紅とも見ゆべかんめり、風靜なるに六波羅わたり斯る大火を見るこそ訝しけれ、いづれ唯事ならじと思へば何となく心元なく、水汲て急ぎ坊に歸り、一鉢一鉢、常の如く都をさして出で行きぬ。

瀧口入道都に来て見れば、思の外なる大火にて、六波羅池殿西八條の邊より、京白河四五萬の在家、方に煙の中に入り、洛中の民はさながら狂せるが如く、老を負ひ幼を扶けて火を避くる者、僅の家財を携へて逃ぐる者、或は雑沓の中に傷きて助を求むる者、或は連れ立ちし人に離れて路頭に迷へる者、何れも姿容を取り亂して右に走り左に馳せ、叫喚呼號の響、街衢に充ち満ちて、修羅の巷もかくやと思はれたり、只見る幾隊の六波羅武者、蹄の音高く馳せ來りて、人波打てる狭き道をば、容赦も無く蹴散し、指して行衛は北鳥羽の方、いづこと問へど人は知らず、平家一門の邸宅、武士の宿所、残りなく、火中にあれども消し止めんとする人の影見えす、そも何事の起れるや、問ふ人のみ多くして、答ふる者はなし、全都の民は夢に夢見る心地して只心安からず惶れ惑へるのみ。

瀧口事の由を聞かん由も無く、轟く胸を抑へつゝ、朱雀の方に來れば、向より形亂せる二三人の女房の大路を北に急ぎ行くに、瀧口呼止めて事の由を尋ねれば、一人の女房立止り

て悲しげに、

「未だ聞かれずや、大臣殿（宗盛）の思召にて、主上を始め一門残らず西國に落ちさせ給ふぞや、もし縁の人ならば跡より追つかれよ、」

言捨て、忙しげに走り行く、瀧口、あつとばかりに呆れて、さそくの考も出でず、鬼の如き兩眼より涙をはらりと流し、恨めしげに伏見の方を打見やれば、明けゆく空に雲行のみ早し。

榮華の夢早や覺めて、没落の悲方に来りぬ、盛衰興亡はのがれぬ世の習なれば、平家に於て獨歎くべきに非ず、只まだ見ぬ敵に怯をなして輕々しく帝都を離れ給へる大臣殿の思召こそ心得ね、兎ても角ても叶はぬ命ならば、御所の礎枕にして、魚山の夜嵐に屍を吹かせてこそ、散りても芳しき天晴名門の末路なれ、三代の仇を重ねたる關東武士が野馬の蹄に祖先の墳墓を蹴散させて、一門おめ／＼西海の睡に迷ひ行く、とても流さん末の浮名はいざ知らず、まのあたり百代までの耻辱なりと思はぬこそ是非なけれ。

瀧口はしばし、無念の涙を絞りしが、せめて燒跡なりとも弔はんと、西八條の方に辿り行

けば、夜半にや立ちし、早や落人の影だに見えず、昨日まではさしも美麗に建て連ねし大門高臺、一夜の煙と立昇りて、焼野原、茫茫として立木に迷ふ鳥の聲のみ悲し、焼け残るたる築垣の蔭より、屋方の跡を眺むれば、朱塗の中門のみ半残りて、門もる人もなし、嗚呼、被官郎黨の日頃寵に誇り恩を恣にせる者、そも幾百千人の多きぞや、思はざりき主家仆れ城地亡びて、而も一騎の屍を其焼跡に留むる者無らんとは、けにや榮華は夢か幻か高厦十年にして立てども一朝の煙にだも堪へず、昨夕玉趾珠冠に容儀を正し、参仕拜趨の人に冊かれし人、今朝長汀の波に漂ひ、旅泊の月に踏躡ひて、思寝に見ん夢ならでは還り難き昔、慕ふて益なし、有爲轉變の世の中に、只最後の潔きこそ肝要なるに、天に背き人に離れいづれ遁れぬ終をば、何處まで惜まるゝ一門の人々ぞ、彼を思ひ是を思ひ、瀧口は焼跡にたゞすみて、暫時感慨の涙に暮れ居たり。

稍ありて太息と共に立上り、昔ありし我屋敷を打見やれば、其邊は一面の灰燼となりて、何處をそれとも見別け難し、さても我父は如何にせませしか、一門の人々と共に落人にならせ給ひしか、御老年の此期に及びて、斯る大變を見せ参らするこそうたてき限なれ、瀧上りて、焼野に引る垣越の松影長し。

口今は誰しれる人も無き跡ながら、昔の盛忍はれて、盡きぬ名残に幾度か振廻りつ、持し錫杖重けに打鳴して、何思ひけん、小松殿の墓所指して立去し頃は、夜明け日も少しく上りて、焼野に引る垣越の松影長し。

第二十七

「あな浅ましき御一門の成れの果、草葉の蔭に如何に御覽せられ候やらん、御墓の石にまだ蒸す苔とても無き今の日に、早や退没の悲に遇はんとは申すも中々に恐なり、御

靈前に香華を手向くるもの明日よりは有りや無しや、北國關東の夷共の君が安眠の礎を
 駭かせ参らせん事、思へば心外の限にこそ候へ、君は元來英明にましまして、事今日あ
 らんことかねてより悟らせ給ひ、神佛三寶に祈誓して御世を早うさせ給ひけるこそ、最
 と有り難けれ、夢にも斯くと知りなば不肖時頼、直に後世の御供仕るべう候ひしに、
 性頑冥にして悟り得ず、望無き世に長生へて、斯る無念をまのあたり見る事のかへすが
 へすも口惜う候てや、時頼進んでは君が鴻恩の萬一に答ふる能はず退ては亡國の餘類
 となれる身の、今更君に合はず面目も候はず、あはれ匹夫の身は物の數ならず、願ふは
 尊靈の冥護を以て、世を昔に引き返し、御一門を再び都に納れさせ給へし、
 急きくる涙に咽びながら、搔き口説く言の葉も定かならず、亂れし心を押鎮めつ、眼を閉
 ぢ首を俯して石段の上に打伏せば、あやにくや、没落の今の哀に引き比べて、盛なりし昔
 の事、雲の如く胸に湧き、祈念の珠數にはふり落つる懐舊の涙のみ繁し、あゝとばかり我
 知らず身を振はして立上り、踉めく體を踏みしむる右手の支柱、曉の露まだ冷かなる内府
 の御墳、哀れ榮華十年の遺物なりけり。

盛の花と人に惜まれ、世に歌はれて、春の眞中に散りにし人の羨まるゝ哉、陽炎の影より
 淡き身を愁ひ生残りて、木枯嵐の風の宿となり果てよは、我爲に哀を慰むる鳥も無し、家
 仆れ國滅びて六尺の身おくに處なく、天低く地薄くして昔をかへす夢も無し——叶々思ふ
 まじ、我ながら不覺なりき、修行の肩に歌袋かけて、天地を一爐と觀せし昔人も有しりに、
 三衣を纏ひ一鉢を捧ぐる身の、世の盛衰に離れ得ず、生死流轉の間に彷徨へるこそ朽惜し
 き至なれ、世を捨てし昔の心を思出せば、良しや天落ち地裂くるとも、今更驚く謂やある、
 常無しと見つる此世に悲むべき秋もなく、喜ぶべき春もなく、青山白雲長へに青く長へ
 に白し、あはれ、本覺大悟の智慧の火よ、我胸に尙蛇の如く榮はれる一切煩惱を渣滓も
 残らず焼き盡せよかし。

斯くて瀧口、主家の大變に動きそめたる心根を、辛くも抑へて、常の如く嵯峨の奥に朝夕
 の行を懈らざりしが、都近く住みて、變り果てし世の様を見る事を忍び得ざりけん、其年
 七月の末、年久しく住みなれし往生院を跡にして、飄然と何處ともなく出で行きぬ。

昨日は東關の下に善並べし十萬騎、今日は西海の波に漂ふ三千餘人、強きに附く人の情なれば、世に落人の宿る影は無く、太宰府の一夜の夢に昔を忍ぶ違まもあらで、緒方に追はれ、松浦に逼られ、九國の山野廣けれども、立止るべき足場もなし、去年は九重の雲に見し秋の月を、八重の汐路に打眺めつ、覺束なくも明し暮せし壽永二年、水島室山の二戦に勝利を得しより、勢漸く強く、頼朝義仲の争の際に山陰山陽を切從へ、福原の舊都まで攻上りしが、一の谷の一戦に源九郎が爲に脆くも打破られ、須磨の浦曲の朝風に散り行く櫻の哀を止めて落行く先は、門司赤司の元の海、六十餘州の半を領せし平家の一門、船を繋ぐべき渚だに無く、波のまにまに行衛も知らぬ梶枕、高麗契丹の雲の端までもとは思へども、流石忍ばれず、今は屋島壇の浦に鎧を止めて、只すら最後の日を待てるぞ哀なる。

壽永三年三月の末、夕暮近き頃、紀州高野山を上り行く二人の旅人ありけり、浮世を忍ぶ

旅路なればにや、一人は深編笠に面を隠して、顔容知るに由無けれども、其装束は世の常ならず、古錦欄の下衣に、紅梅萌黄の浮文に張裏したる狩衣を着け、紫裾濃の袴腰、横幅廣く結び下て、平塵の細鞘、優に下け、摺皮の踏皮に同じ色の行纏穿ちしは、何れ由緒ある人の公達と思はれたり、他の一人は年の頃二十六七、前なる人の従者と覺しく、日に焼け色黒みたれども、眉秀で眼涼しき優男、少し色割けたる厚塗の立烏帽子に卵の花色の布衣を着け、黒塗の野太刀を佩きたり、旅慣れぬにや、將長の徒歩に疲れしにや、二人とも弱り果てし如く、踏み縮むる足に力なく青竹の杖に身を持たせて、主従相扶け喘ぎく上り行く高野の山路、早や夕陽も名残を山の巔に止めて、崖の陰、森の下、恐しき途に黒みたり、秘密の山に常夜の燈無ければ、あなたの木の根、こなたの岩角に膝を打ち、足を挫きて、仆れんとする身を辛く支へ、主従手に手を取り合ひて、顔見合す毎に彌増る太息の数、春の山風身に染て入相の鐘の音に梵缶の響幽なるも哀なり。

十歩に小休、百歩に大憩、辛うじて猶上り行けば、讀經の聲、震鈴の響漸く繁くなりて、老松古杉の木立を漏れて仄に見ゆる諸坊の燈、早や行先も遠からじと勇み踏み行行く程

に、間も無く蓮生門を過ぎて主従御影堂の此方に立止りぬ、従者は近き邊の院に立寄りて何事か物問ふ様子なりしが、やがて元の所に立歸り、何やら主人に耳語けば、點頭きて尙も山深く上り行きぬ。

飛鉦地に落ちて峻に生ひし古松の蔭、半立木を其儘に、結びたる一個の庵室、夜毎の嵐に破れ寂びたる板間より、漏る燈の影暗く、香烟窓を迷ひ出で、心細き鈴の音、春ながら物さびたり、二人は此の庵室の前に止りしが、従者はやがて門に立ちよりて、

「瀧口入道殿の庵室は茲に非ずや、遙々訪ね來りし主従二人、こゝ開け給へし、と呼ばれば、内より燈提けて出來りたる一人の僧、

「瀧口が庵は此處ながら浮世の人にはるゝ訪はるゝ覺はなきに」、
と言つゝ訝しげなる顔色して門を開けば、編笠脱ぎつゝと通る件の旅人、僧は一目見るより打驚き、砌にひたと頭を附けて、

「これは／＼」、

第二十九

世移り人失せぬれば都は今は故郷ならず、満目舊山川、眺むる我も元の身なれども、變り果てし盛衰に、憂き事のみぞ多かる世は、嵯峨の里も樂しからず、高野山に上りて早や三年、山遠く谷深ければ、入りにし跡を訪ふ人としてあらざれば、松風ならで世に友もなき庵室に、夜に入りて訪れし其人を誰と思ひきや、小松の三位中將維盛卿にて、それに從へるは足助次郎重景ならんとは、夢かとはばかり驚きながら扶け參らせて一間に招じ、身は遙に席を隔てゝ拜伏しぬ。思ひ懸けぬ對面に、左右の言葉もなく、先づものは涙なり、瀧口つら／＼御容様を見上ぐれば、没落以來幾その艱苦を忍び給ひけん、御顔瘦せ衰へ、青絲の髮疎かに、紅玉の膚色消え、平門第一の美男と唱はれし昔の様子何こにと疑はるゝばかり、年にもあらで老い給ひし御面に、故内府の俤あるも哀なり。

「こは現とも覺え候はぬものかな、扱も屋島をば何として遁れ出でさせ給ひけん、當今天が下は源氏の勢に充ちぬるに、そも何地を指ての御旅路にて候やらん」、

維盛卿は涙を拭ひ、

「さればとよ一門没落の時は、我も人並に都を立出で、西國に下りしが、行くも歸るも水の上、風に漂ふ波枕に三年の春秋は、安き夢とては無かりしぞや、或はよるべ無き門司の沖に、磯の千鳥と共に泣明し、或は須磨を追はれて明石の浦に昔人の風雅を羨み、重ね重ねし憂事の數、堪へ忍ぶ身にも忍び難きは、都に残せし妻子が事、波の上に起居する身のせん術無ければ、此の年月は心にもなき疎遠に打過ぎつ、嗚や我を恨み居らんと思へば彌増す懐しさ、兎ても亡びんうたかたの身にしあれば、息ある内に、最愛しき者を見もし見られもせんと、辛くも思ひ決め、重景一人伴ひ、夜に紛れて屋島を逃れ、數々の憂き目を見て、阿波の結城の浦より名も恐しき鳴門の沖を漕ぎ過ぎて、辛く此地までは來つるぞや、憐れと思へ瀧口、

打萎れし御有様、重景も瀧口も只袂を絞るばかりなり、瀧口、

「優に哀なる御述懐、覺えず法衣を沾し申しぬ、然るにても如何なれば都へは行き給はで、此山には上り給ひし、

維盛卿は太息吐き給ひ、然ばなり、

「都に直に歸りたき心は山々なれども熟々思へば、斯る體にて關東武士の充てる都の中に入らんは、捕はれに行くも同じこと、先には本三位の卿（重衡）の一の谷にて擣となり、生耻を京鎌倉に曝せしさへあるに、我れ平家の嫡流として名もなき武士の手にかゝらん事、如何にも口惜しく、妻子の愛は燃ゆるばかりに切なれども、心に心を争ひて辛く此山に上りしなり、高野に汝あること風の便に聞きしゆる汝を頼みて、戒を受け様を變へ、其上にて心安く都にも入り妻子にも過はゞやとこそ思ふなれ、

瀧口は首を床に附しまゝ暫泪に咽び居たりしが、

「都は君が三代の故郷なるに、様を變へでは御名も唱へられぬ世の變遷こそ是非なけれ、思へば故内府の恩顧の侍、其數を知らざる内に、世を捨てし瀧口の此期に及びて君の御役に立たん事、生前の面目此上や候べき、故内府の鴻恩に比べては高野の山も高からず、熊野の海も深からず、いづれ世に用なき此身なれば、よしや一命を召され候とも、苦しからず、あゝ斯る身は枯れても折れても、野末の朽木、素より物の數ならず、只金

枝玉葉の御身として、定めなき世の波風に漂ひ給ふこと、御痛はしう存じ候し。言ひつゝ涙をはらくと流せば、維盛卿も重景も昔の身の上思ひ出で泣くより外に言葉もなし。

第三十

二人の賓客を次の室にやすませて、瀧口は孤燈の下に只一人寝もやらず、つらく思廻らせば、痛はしきは維盛卿が身の上なり、誰あらん小松殿の嫡男として、名門の跡を継ぐべき御身なるに、天が下に此山ならで身を寄せ給ふ所なきまでに零落れさせ給ひしは過世如何なる因縁あればにや、習ひもお在さぬ徒歩の旅に、知らぬ山川を遙るばる彷徨ひ給ふさへあるに、玉の襖錦の床に隙も風も厭はれし昔にひき換へて、露にも堪へぬかゝる破屋に一夜の宿を願ひ給ふ御可憐しさよ、變りし世は隨意ならで、指せる都には得も行き給はず、心にもあらぬ落髪を遂てだに相見んと焦れ給ふ、妻子の恩愛は如何に深かるべきぞ、御容さへ瘦れさせ給ひて、此年月の忍び給ひし憂事も思ひやらる、思ひ出せば治承の春、西八條の花見

の宴に、櫻がざして青海波を舞ひ給ひし御姿、今尙昨の如く覺ゆるに、脇を勤し重景さへ同じ落人となりて、都ならぬ高野の衣嵐に昔の哀を物語らんとは、怪しきまで奇しき縁なれ、あはれ、肩に懸けられし恩賜の御衣に一門の譽を擔ひ、並居る人よりは、深山木の楊梅と稱へられ、枯野の小松と歌はれし其時は人も我も誰かは今日あるを想ふべき、昔は夢か、今は現か、十年にも足らぬ間に變り果てたる世の様を見るもの哉。

果てしなき今昔の感慨に、瀧口は柱に凭りしまゝ、しばし茫然たりしが、不圖電の如く胸に感じて、思起したる小松殿の言葉に、瞶みし眉動き、沈みたる眼閃き、頰せし膝を立直して屹と衣の襟を搔合せぬ、思へば思へば、情なき人を恨み侘びて様を變んと思ひ決めつゝ、餘所ながら此世の告別に伺候せし時、世を捨つる我とも知り給はで、頼み置かれし、維盛卿の御事、盛と見えし世に衰へん世の末の事、愚なる我と思ひ料らん由もなければ少しも心に懸けざりしが、扱は斯らん後の今の事を仰せ置かれしよ。
「少將は心弱き者、一朝事あらん時、妻子の愛に惹かされて、未練の最後に一門の耻を蒙さんち測られず、時頼たのむは其方一人」

幾度と無く繰返されし御仰、六波羅上下の武士より、我れ一人を擇ばれし御心の、我は只
 忝かたじけなさに前後をも辨わかへざりしが、今の維盛卿の有様正に御遺言に適中せり、都を跡に西國へ
 落給ひしさへ口惜しきに、屋島の浦に明日にも亡びん一門の人々を振捨て、武士は櫻木、
 散りての後の名をも惜み給はで、妻子の愛にめくも、茲まで迷ひ來られし御心根、哀
 は深からぬにはあらねども、平家の嫡流として、未練の譏は末代までも逃れ給はじ、斯く
 ならん末を思ひ料らせ給ひたればこそ、故内府殿の扱こそ我に仰せ置かれしなれ、此處ぞ
 御恩の報じ處、情を殺し心を鬼にして、情なき諫言を進むるも、御身の爲、御家の爲、さ
 ては過ぎ去り給ひし父君の御爲ぞや、世に埋木の花咲く事も無かりし我れ、圖らずも御恩
 の萬一を報ゆるの機會に遇ひしこそ、息ある内の面目なれ、あゝ、然なり、然なりノと
 點頭うなづきしが、然るにても痛はしきは維盛卿、斯る由ありとも知り給はで、情なの者よ、變
 りし世に心までかと、一圖に我を恨み給はん事の心苦しきよ、あゝ忠義の爲とは言ひなが
 ら、君を恨ませ、辱しめて、仕たり顔なる我はそも何の因果ぞや。
 義理と情の二岐かけて、瀧口が心はとつおいつ、外には見えぬ胸の嵐に亂脈打て暫時思案

に暮れ居りしが、やゝありて兩眼よりはらノと落涙し、思はず口走る絞るが如き一語、
 「オ御許あれや、君」、
 言ひつゝ、眼を閉ぢ維盛卿の御寢間に向ひ岸破と打伏しぬ。折柄杉の妻戸を徐に押開くる音
 す、瀧口首を擧げ燈差し向けて、何者と打見れば、足助二郎重景なり、端なくは進まず、
 首を垂れて萎れて出でたる有様は仔細ありけ也、瀧口訝しげに、
 「足助殿には未だ御寢ならざるや、
 問ハば重景太息吐き、
 「瀧口殿」、
 聲を忍ばせて、
 「重景改めて御邊に謝罪せねばならぬ事あり」、
 「何と仰ある」、

何事と、眉を顰むる瀧口を重景は怯ろしけに打諦り、
重景、今更御邊と見合する面目も無けれども、我身にして我身にあらぬ今の我れ、逃れ
んに道も無く厚かましくも先程よりの體たらく、御邊の目には嗚や厚顔とも鐵面とも見
えつらん、維盛卿の前なれば心を明さん折も無く、暫の間ながら、御邊の顔見る毎に胸
を裂かるゝ思ひありし、そは他事にもあらず、横笛が事し、
言ひつゝ瀧口が顔、竊むが如く見上れば、默然として眼を閉ぢしまゝ衣の袖の搖きも見せ
ず、

「世を捨てし御邊が清き心には、今は昔の恨とて残らざるべけれ共、凡夫の悲しさは、一
度犯せる悪事は善きにつけ、悪しきにつけ、影の如く付き纏ひて、此の年月の心苦し
さ、自業自得なれば誰に向て憂を分たん術も無く、なせし罪に比べて只々我苦の輕き
を恨むのみ、喃瀧口殿、最早や世に浮ぶ瀬も無き此身、今更惜むべき譽も無ければ、誰に
耻づべき名もあらず、重景が一期の懺悔聞給へ、御邊の可惜武士を捨てゝ世を遁れ給ひ
しも、扱は横笛が深草の里に果敢なき終を遂けたりしも、起を糺せば、皆此重景が所業

にて候ぞや、

瀧口は猶も默然として聞て驚く様も見えず、重景は語を續けて、

「事の始はくだくだしければ言はず、何れ若氣の春の駒、止めても止らぬ戀路をば行衛も
知らず踏迷ふて、瘦す憂身も誰故とこそ思ひけめ、我心の萬一も酌みとらで、何處まで
もつれなき横笛、冷泉と云へる知れる老女を懸橋に様子を探れば、御身も疾くより心を
寄する由、扱は横笛、我に難而きも御邊に義理を立つる爲と、心に嫉ましく思ひ、彼の
老女を傳手に御邊が事色々悪様に言ひなせし事、いかに戀路に迷ひし人の常とは言へ、
今更我ながら心の程の怪まるゝばかり、又夫れのみならず、御邊に横笛が事を思ひ切ら
せん爲め、潜に御邊が父左衛門殿に、親實を上へに言ひ入れしこともあり、皆之れ重景な
らぬ女色に心を奪はれし戀の奴の爲せし業、言ふも中々慚愧の至にこそ、御邊が世を捨
てしと聞て、あゝ許し給へ、六波羅の人々知るも知らぬも哀と思はざるは無かりしに、
同じ小松殿の御内に朝夕顔を見合せし朋輩の我れ、却て心の底に喜びしも戀てふ悪魔の
なせる業、あはれ時こそ來りたれ、外に戀を争ふ人無ければ、横笛こそは我に靡めと、

夜となく晝とも言はず、搔口説きしに、思懸なや、横笛も亦程なく行衛しれずなりぬ、跡にて人の噂に聞けば、世を捨つるまで己を慕ひし御邊の誠に感じ、其身も深草の邊に庵を結びて御邊が爲に節を守りしが、乙女心の憂に耐へ得で、秋をも待たず果敢なくなりしとかや、思ひし人は世を去りて、残る哀は我にのみ集り、迷の夢醒めて初めて覺る我身の罪、あゝ我微りせば、御邊も可惜武士を捨てじ、横笛も亦世を早うせじ、とても叶はぬ戀とは知らで、道ならぬ手段を用ひても望を貫かんと務めし愚さよ、唯我ありし爲、浮世の義理に明けては言はぬ互の心、底の流の通ふに由なく、御邊と言ひ、横笛と言ひ、皆盛年の身を以て、或は墨染の衣に世を通れ、或は咲きもせぬ蕾のまゝに散り果てぬ、世の恨事何物か之に過ぐべうも覺えず、今宵端なく御身に遇ひ、ありしにも似ぬ體を見るにつけ、皆是れ重景が爲せる業と思へばいぶせき庵に多年の行業にも若し知り給はど、嗚や我を恨み給ひけん、——此期に及び多くは言はじ只々御邊が許を願のみ、慚愧と悲哀に情迫り聲さへ潤みて、額の汗を拭ひ敢ず。

重景が事、斯くあらんとは兼てより略々察し知りし瀧口なれば、さしてさわがず只横笛が

事端なく胸に浮びては流石に色に忍びかねて、法衣の濡るゝを覺えず、打蕭れたる重景が様を見れば、今更憎む心も出ず、世にときめきし昔に思ひ比べて哀は一入深し。

「若き時の過失は人毎に免れず、懺悔めきたる述懐は瀧口却て迷惑に存じ候ぞや、戀には脆き我れ人の心、など御邊一人の罪にてあるべき、言ふて還らぬ事は言はざらんには若かず、何事も過ぎし昔は恨もなく喜もなし、世に望なき瀧口今更何隔意の候べき、只只世にある御邊の行末永き忠勤こそ願はしけれ、」

淡きこと水の如きは大人の心か、昔の仇を夢と見て今の現に報いんともせず、恨みず亂れず、光風霽月の雅量は流石は世を觀じたる瀧口入道なり。

第三十二

早やほのゝくと明けなんす春の曉、峯の巔、空の雲ならでまだ照り染めぬ旭影、霞に鎖せらる八つの谷間に「夜」尙彷徨ひて梢を鳴す清嵐に鳥の聲猶眠れるが如し、遠近の僧院庵室に漸く聞ゆる、經の聲、鈴の響、浮世離れし物音に曉の静けさ一入深し、まことや帝城を

離れて二百里、郷里を去りて無人聲、同じ土ながらさながら世を隔てたる高野山、眞言秘

密の靈蹟に感應の心も轉澄みぬべし。
竹苑椒房の昔に變り、破れ頽れたる僧庵に如何なる夜をや過し給へる、露深き枕邊に夕の
夢を残り置きて起出で給へる維盛卿、重景も共に立出で、主や何處と打見やれば、此方の
一間に瀧口入道、終夜思ひ煩ひて顔の色徒ならず、肅然として佛壇に向ひ、眼を閉ぢて
祈念の體、心細くも立上る一縷の香煙に身を包ませて、爪繰る珠數の音牙えたり、佛壇の
正面には故内府の靈位を安置しあるに、維盛卿も重景も是はとばかりに拜伏し、共に祈念
を凝しける、聽て觀經終りて後、維盛卿は瀧口に向ひ、

「扱も殊勝の事を見るものよ、今廣き日の本に淨蓮大禪門の御靈位を設けて朝夕の回向を
なさんもの瀧口爾ならで外に其人ありとも覚えざるぞ、思へば先君の被官内人、幾百人と
其の數を知らざりしが、世の盛衰に隨れて、多くは身を浮草の西東、舊の主人に弓引く
ものさへある中に、世を捨て、昔を忘れぬ爾が殊勝さよ、其れには反して、世に落
人の見る影もなき今の我身、草葉の蔭より先君の嗚かし臍甲斐なき者と思ひ給はん、世

に望なき維盛が心にかゝるは此事一つ、
言ひつゝ涙を拭ひ給ふ。

瀧口は默然として居たりしが、暫くありて屹と面を挙げ、襟を正して維盛が前に恭しく
兩手を突き、

「然ほど先君の事、御心に懸けさせ給ふ程ならば、何とて斯る落人にはならせ給ひしぞ、
意外の一言に維盛卿は膝押進めて、

「ナ何と言ふ、」

「御驚は然ることながら、御身の爲、又御一門の爲、御恨の程を身一つに忍びて瀧口が申上
ぐる事、一通り御聞あれ、そも君は正しく平家の嫡流にてお在さずや、今は御一門の方
方屋島の浦に在りて、生死を一にし、存亡を共にして、回復の事はぬ迄も、押寄する
源氏に最後の一矢を酬いんと日夜肝膽を碎かるゝ事申すも中々の事に候へ、そも壽永の
初め、指す敵の旗影も見で、都を落らさせ給ひしさへ平家末代の耻辱なるに、せめて此
上は、一門の將士御座船枕にして屍を西海の波に浮べてこそ、天晴名門の最後潔しとこそ

申すべけれ、然るを君には宗族故舊を波濤の上に振捨て、妻子の情に迷はせられ、斯く見苦しき落人に成らせ給ひしぞ心外千萬なる、明日にも屋島没落の曉に御一門残らす雄々しき最後を遂げ給ひけん時、君一人は如何にならせ給ふ御心に候や、若し又關東の手に捕はれ給ふ事のあらんには、君こそは妻子の愛に一門の義を捨て、死すべき命を卑怯にも遁れ給ひしと世の口々に嘲られて、京鎌倉に立つ浮名をば君には風やいつこ聞き給はんずる御心に候や、申すも恐れある事ながら、御父重盛卿は智仁勇の三徳を具へられし古今の明器、敵も味方も共に傾慕する所なるに、君には其正嫡と生れ給ひて、先君の譽を傷けん事口惜しくは思さずや、本三位の卿の擒となりて、京鎌倉に耻を暴せしこと、君には口惜しう見え給ふ程ならば、何とて無官の太夫が健氣なる討死を譽とは思ひ給はぬ、あはれ君、先君の御事、一門の耻辱となる由を思ひ給はば、願くば一刻も早く屋島に歸り給へ、瀧口君を宿し參らする庵も候はず、あゝ斯くつれなく待遇し參らするも、故内府が御恩の萬分の一に答へん瀧口が微衷、詮する處君の御爲を思へばなり、御恨の程もさこそと思ひ遣らるれども、今は言ひ解かん術も無し、何事も申さず、

只々屋島に歸らせ給ひ、御一門と生死を共にし給へ、
 忌まず、憚らず、涙ながらに諫むる瀧口入道、維盛卿は至極の道理に面目なげに差し俯き、狩衣の御袖を絞りかねしが、言葉も無くツと次の室に立入り給ふ、跡見送りて瀧口は其の儘岸破と伏して男泣に泣沈みぬ。

第三十三

よもすがら恩義と情の岐巷に立ちて何れをそれと決め難し瀧口が、思ひ極めたる直諫に、さすがに御身の上を耻ぢらひ給ひてや、言葉も無く一間に入りし維盛卿、呶々思へば君が馬前の水つき執て、大儀ぞの一撃を此上なき譽と人も思ひ我も誇りし日もありしに、如何に末の世とは言ひながら、露忍ぶ木蔭も無く彷徨ひ給へる今の痛はしきに、快き一夜の宿も得せず、面のあたり主を耻しめて、忠義顔なる我はそも如何なる因果ぞや、末望みなき落人故の此つれなさとなを恨み給はんことのうたてさよ、あはれ故内府在天の靈も照覽あれ、血を吐くばかりの瀧口が胸の思ひ、聊か二十餘年の御恩に酬ゆるの寸志にて候ぞや。

松杉暗き山中なれば、傾き易き夕日の影、はや今日の春も暮れなんす、姿ばかりは墨染にして、君が行末を嶮しき山路に思ひ較べつ、溪間の泉を關伽桶に汲取りて立歸る瀧口入道、庵の中を見れば、維盛卿も重景も何處に行きしか影も無し、扱は我諫を納れ給ひて屋島に歸られしか、然るにても一言の我に御告知なき訝しさよ、四邊を見廻せば不圖眼にとまる經机の上にある薄色の折紙、取上げ見れば維盛卿の筆と覺しく、水莖の跡鮮やかに、走り書せる二首の和歌

かへるべき梢はあれどいかにせん

風をいのちの身にしあなれば

濱千鳥入りにし跡をしらせねば

潮のひる間に尋ねてもみよ

哀れ、御身を落葉と觀じ給ひて元の枝をば屋島とは見給ひけん、入りにし跡を何處とも知らせぬ濱千鳥、潮干の磯に何を尋ねよとや、――扱はとばかり瀧口は折紙の面を凝視めつ、暫時茫然として居たりしが何思ひけん、豫て秘藏せし昔の名残の小鍛冶の鞘卷狼狽し

く取出して衣の袖に隠し持ち麓の方に急ぎける。

路傍の家に維盛卿が事それとなしに尋ねれば、狩衣着し侍二人麓し方に下りしは早や程過ぎし前の事なりと答ふるに、愈々足を早め走るが如く山を下りて路すがら人に問へば、尋ぬる人は和歌の浦さして急ぎ行きしと言ふ、瀧口胸愈々轟き氣も半亂れて飛ぶが如く濱邊さして走り行く、雲に聳ゆる高野の山よりは眼下に瞰下す和歌の浦も歩めば遠き十里の郷路、元より一刻、半晌の途ならず、日は既に暮れ果て、朧けながら照り渡る彌生半の春の夜の月、天地を鎖す青紗の幕は雲か烟か將た霞か、風雅のすさびならで、生死の境に争へる身のけに一刻千金の夕かな、夢路を辿る心地して瀧口は夜もすがら馳せて辛く着ける和歌の浦、見渡せば海原遠く烟籠めて月影ならで物もなく、濱千鳥聲絶えて、浦吹く風に音澄める磯馴松、波の響のみいと冴えたり、入りにし人の跡もやと、此處彼處彷徨へば、とある岸邊の大なる松の幹を削りて、夜目にも著き數行の文字、月の光に立寄り見れば、

南無三寶

「祖父太政大臣 平の朝臣清盛公 法名淨海、親父小松の内大臣左大将重盛公 法名淨蓮 三

位の中將維盛年二十七歳、壽永三年三月十八日和歌の浦に入水す、從者足助二郎重景年
二十五歳殉死す、

墨痕淋漓として乾かざれども、波靜にして水に哀の痕も残らず、瀧口はあはやと計り、松
の根元に伏轉び、

「許し給へし、

と言ふも切なる涙聲、哀を返す何處の花ぞ、行衛も知らず二片、三片、誘ふ春風は情か無
情か。

* * * * *

次の日の朝、和歌の浦の漁夫磯邊に來て見れば、松の根元に腹掻切りて死せる一個の僧あ
り、流石汚すに忍びでや墨染の衣は傍の松枝に打懸けて、身に纏へるは練布の白衣、脚下
に綿津見の淵を置きて、刃持つ手に毛程の筋の亂れも見せず、血汐の糊に塗たる朱溝の鞘
卷逆手に握りて膝も頰さず端座せる姿は、何れ名ある武士の果ならん。

嗚呼是れ戀に望を失ひて、世を捨てし身の世に捨てられず、主家の運命を影に負ふて、二

十六年を盛衰の波に漂はせし、齋藤瀧口時頼が、まこと浮世の最後なりけり。

瀧口入道 完

昭和六年五月廿六日印刷
昭和六年五月廿五日發行

春陽堂文庫 一

〔瀧口入道〕

定價金拾五錢

檢 印



作 者 高 山 林 次 郎

著 作 權 者 東 京 市 日 本 橋 區 通 三 丁 目 八
發 行 者 和 田 利 彦

印 刷 者 東 京 市 日 本 橋 區 通 三 丁 目 八
木 呂 子 斗 鬼 次

發 行 所

東 京 ・ 日 本 橋 ・ 通 三 丁 目
振 替 東 京 一 六 一 七 番

春 陽 堂

電 話 日 本 橋 五 一 番

(刷 印 所 刷 印 陽 東)

春陽堂文庫既刊書目

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
相互扶助論	河内山と直侍	三人吉三	村井長庵	倫敦塔・その他	三四郎	草枕	土	坊ちやん	虞美人草	瀧口入道
大ク 杉ロ ボト キン 榮	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	長塚節	夏目漱石	夏目漱石	高山樗牛
税三 4十 錢	税三 6十 錢	税二 4十 錢	税二 4十 錢	税十 2 錢	税三 4十 錢	税十 2十 錢	税三 4十 錢	税十 2十 錢	税四 6十 錢	税十 2十 錢

春陽堂文庫新刊書目

- | | | | |
|----|---------|---------------|------|
| 1 | 瀧口入道 | 高山樗牛 | ¥.15 |
| 2 | 虞美人草 | 夏目漱石 | ¥.40 |
| 3 | 坊ちゃん | 夏目漱石 | ¥.15 |
| 4 | 土 | 長塚節 | ¥.35 |
| 5 | 草枕 | 夏目漱石 | ¥.15 |
| 6 | 三四郎 | 夏目漱石 | ¥.30 |
| 7 | 倫敦塔・その他 | 夏目漱石 | ¥.10 |
| 8 | 村井長庵 | 河竹黙阿彌 | ¥.25 |
| 9 | 三人吉三 | 河竹黙阿彌 | ¥.25 |
| 10 | 河内山直侍 | 河竹黙阿彌 | ¥.35 |
| 11 | 相互扶助論 | クロボトキン
大杉榮 | ¥.30 |

東京春陽堂發兌

終